

NPO 法人大学コンソーシアム大阪からの 報告書より

【目次】

1	養育者との愛着形成	32
2	生活リズム（基本的生活習慣の育成）	78
3	食	134
4	絵本	198
5	集団遊び	260

1 愛着

1. フィールドワーク実施の前提整理

(1) 愛着にかかわる実態

大阪市が平成 19 年度に実施した「大阪市就学前児童生活実態アンケート調査結果報告書(平成 19 年度)」によると、養育者の育児に関する実態は、次のようにまとめられている。

養育者の就業形態との関係でいえば、無職>自営業>パート・アルバイト>常時雇用の順で子どもと十分に話をする時間があると答える割合が減少する。就労で時間に制約がある養育者ほど、子どもと話す時間がないと感じており、これは現状を反映した結果である。また、子どもの年齢があがるにつれて、十分に話す時間があるという回答は減少する。

自由記述を見ると、子どもが大きくなると年下のきょうだいに養育者の手が取られ、十分かわる時間が取れなくなる様子が伺える。年下のきょうだいの有無で比較すると、きょうだいのいる方が子どもと話す時間があるという答えは少なくなる。ただし、きょうだいがいなくても、子どもが大きくなると十分話をする時間があるという答えは少なくなる。したがって、年齢による変化は、子ども自身の遊びの幅が広がり、養育者がかかわる機会が減ったことも理由になっていると考えることができるだろう。

次に、「子どもと話をするのは楽しい」「子どもと話をする時間をもつように心がけている」の2項目についても養育者の就労形態、子どもの年齢別に集計した。「時間があるかどうか」に対する回答とは異なり、養育者の就労形態による違いは見られない。働いていて十分に時間がとれない養育者であっても、そうでない養育者と同様、子どもと話すように心がけており、また話すのは楽しいと感じている。ところが、子どもが大きくなると「子どもと話をするのは楽しい」と答える割合も、「子どもと話をするように心がけている」と答える割合も減少する。

子どもと一緒に朝食を食べる割合が減少するのと同様に、子どもの身辺自立がすすむとともに子どもとのかわりもまた緩やかに減少する。

表35 子どもと話す時間(子どもの年齢別)

		子どもと十分話をする時間がある				合計
		あてはまる	ややあてはまる	あまりあてはまらない	あてはまらない	
1歳児	度数	412	192	61	3	868
	%	61.7%	28.7%	9.1%	0.4%	100.0%
3歳児	度数	446	418	131	8	1003
	%	44.5%	41.7%	13.1%	0.8%	100.0%
5歳児	度数	509	543	187	11	1250
	%	40.7%	43.4%	15.0%	0.9%	100.0%
合計	度数	1367	1153	379	22	2921
	%	46.8%	39.5%	13.0%	0.8%	100.0%

表36 就業形態別の子どもと話す時間

		子どもと十分話をする時間がある				合計
		あてはまる	ややあてはまる	あまりあてはまらない	あてはまらない	
常時雇用	度数	124	264	154	6	548
	%	22.8%	48.2%	28.1%	1.1%	100.0%
自営業	度数	59	60	25	1	145
	%	40.7%	41.4%	17.2%	0.7%	100.0%
パート・アルバイト	度数	271	335	100	5	711
	%	38.1%	47.1%	14.1%	0.7%	100.0%
無職	度数	821	431	82	6	1340
	%	61.3%	32.2%	6.1%	0.4%	100.0%
その他	度数	85	59	15	4	163
	%	52.1%	36.2%	9.2%	2.5%	100.0%
合計	度数	1360	1149	376	22	2907
	%	46.8%	39.5%	12.9%	0.8%	100.0%

表37 こどもと話すのは楽しい(年齢別)

		お子さんと話しているのは楽しいと感じる				合計
		あてはまる	ややあてはまる	あまりあてはまらない	あてはまらない	
1歳児	度数	535	124	9	0	668
	%	80.1%	18.6%	1.3%	0.0%	100.0%
3歳児	度数	690	281	30	3	1004
	%	68.7%	28.0%	3.0%	0.3%	100.0%
5歳児	度数	803	406	39	1	1249
	%	64.3%	32.5%	3.1%	0.1%	100.0%
合計	度数	2028	811	78	4	2921
	%	69.4%	27.8%	2.7%	0.1%	100.0%

表39 こどもと話すよう心がけている(年齢別)

		できるだけ、こどもと話す時間をもつよう心がけている				合計
		あてはまる	ややあてはまる	あまりあてはまらない	あてはまらない	
1歳児	度数	430	206	29	3	668
	%	64.4%	30.8%	4.3%	0.4%	100.0%
3歳児	度数	536	400	63	5	1004
	%	53.4%	39.8%	6.3%	0.5%	100.0%
5歳児	度数	667	478	98	5	1248
	%	53.4%	38.3%	7.9%	0.4%	100.0%
合計	度数	1633	1084	190	13	2920
	%	55.9%	37.1%	6.5%	0.4%	100.0%

表38 こどもと話すのは楽しい(就業形態別)

		お子さんと話しているのは楽しいと感じる				
		あてはまる	ややあてはまる	あまりあてはまらない	あてはまらない	合計
常時雇用	度数	414	123	12	0	549
	回答	75.4%	22.4%	2.2%	0.0%	100.0%
自営業	度数	101	41	3	0	145
	回答	69.7%	28.3%	2.1%	0.0%	100.0%
パート・アルバイト	度数	464	225	22	1	712
	回答	65.2%	31.6%	3.1%	0.1%	100.0%
無職	度数	929	366	40	3	1338
	回答	69.4%	27.4%	3.0%	0.2%	100.0%
その他	度数	111	51	1	0	163
	回答	68.1%	31.3%	0.6%	0.0%	100.0%
合計	度数	2019	806	78	4	2907
	回答	69.5%	27.7%	2.7%	0.1%	100.0%

表40 こどもと話すよう心がけている(就業形態別)

		できるだけ、こどもと話す時間をもつよう心がけている				合計
		あてはまる	ややあてはまる	あまりあてはまらない	あてはまらない	
常時雇用	度数	326	189	34	1	550
	回答	59.3%	34.4%	6.2%	0.2%	100.0%
自営業	度数	84	49	8	3	144
	回答	58.3%	34.0%	5.6%	2.1%	100.0%
パート・アルバイト	度数	366	284	57	3	710
	回答	51.5%	40.0%	8.0%	0.4%	100.0%
無職	度数	745	505	84	5	1339
	回答	55.6%	37.7%	6.3%	0.4%	100.0%
その他	度数	103	52	7	1	163
	回答	63.2%	31.9%	4.3%	0.6%	100.0%
合計	度数	1624	1079	190	13	2906
	回答	55.9%	37.1%	6.5%	0.4%	100.0%

(2) 実施機関のこれまでの取り組み

安治川保育園

課題意識

- ・自分の子どもよりも自分の生活が優先（仕事など）
- ・子どもを深く愛せない
- ・子どもを愛しているけど表現の仕方がわからない

などで悩んでいる保護者の方が増えているように思う。よりよいコミュニケーションがとれ、支援していく手立てが必要である。

過去3年間の取り組み

- ・区の家児児童相談員の方に、月1度来園していただき、アドバイスをもらっている。

西大道保育所

課題意識

- ・乳児が多い保育所であるので、親子でのふれあいの大切さ、保護者と子どもの愛着形成の大切さを保護者に知ってもらいたい。
- ・当保育所の乳児の保護者は日々仕事に追われているが、保育所の保育内容や保育の取り組みには関心が深く協力的であるので、この保護者たちに子育ての大切さや楽しさを知らせていきたい。

過去3年間の取り組み

- ・地域交流で、「ふれあい遊び」をテーマに地域の親子に家庭でもできる親子遊びを紹介した。
- ・職員で「わらべ遊び」について講師を招いて学習会をした。
- ・参観や発表会において親子のふれあい遊びを紹介し親子で楽しんだ。

生魂幼稚園

課題意識

- ・健全な親子関係を築くために、家庭や園で親子のふれあいタイムをつくり、親子でふれあう楽しさを十分味わう中で、強い絆をつくったり、親の愛情を感じ取ったりできるようにする。(内容)わらべ歌、伝承遊び、童謡を聴いたり歌ったりする、親子製作、親子競技 など。

過去3年間の取り組み

- ・保育参加
- ・親子競技（運動会）
- ・親子製作（作品展）
- ・絵本の読み聞かせ（キッズシアター、天王寺図書館）
- ・親子遠足（隔年実施）
- ・成人教育講演会（子育てについて、食について）
- ・コンサート（オルゴール、ピアノ、琴）

八幡屋保育所 地域子育て支援センター

課題意識

- ・多くの親子が支援センターに遊びに来る中で、いろいろな親子の姿を目にする。中には、母子関係が上手く結べていないのでは、と感じる親子もいる。甘えられる人がいて情緒が安定してこそ、意欲的に遊んだり新しいことに挑戦したり、自分の思いを表現し自立していけるのである。そのために、乳幼児期に愛着関係を築いていくことが重要である。
- ・センターに来る保護者に、乳児期の日常の適切な世話（授乳、オムツ交換など）を通して目と目を合わせ、言葉がけをしたり、身体をふれあわせ共感関係を重ねていくことが大切であることを伝えていきたい。また、愛着関係を築くことが、将来のこどもの人間形成の基礎になることを知らせていきたい。

過去3年間の取り組み

- ・あそびのひろばや親子教室では、子育ての悩み、しんどさを少しでも解消し、リラックスすることで、親がゆとりをもって子どもと接したり、子どもへのかかわり方が変わっていくことに取り組んでいる。また、年齢に合ったふれあい遊び、おもちゃづくりの提供をし、親子で一緒に遊ぶことの楽しさや共感を引き出していくようにしている。
- ・育児相談では、親の話をじっくりと聞き、思いを受け止めながらともに解決方法を考え、子育ての楽しさや喜びが見出せるよう、子育ての見通しをもって話をしている。

茨田第2保育所

課題意識

- ・親子関係が上手く結べず、それが集団生活の中でも他者との関係が上手く取れずにいる姿が、保育所のどの年齢の子どもにも見られる。
- ・子どもが他者に愛されているという愛着関係が重要だと考え、どのように働きかけや子どもの気持ちに沿った言葉がけをすれば、自己肯定感や愛着が生まれるのか探っていきたいと思う。
- ・気になる子どもの姿を話し合う中で、親子関係を築くきっかけづくりとして考えていきたい。

2. フィールドワークの内容

(1) プログラム実施のポイント

「愛着」をテーマとするフィールドワークは、中西利恵准教授（相愛大学人間発達学部子ども発達学科）と実施機関と協議の上、次のような視点からプログラムの実施にあたることとした。

目的

- ・心の安全基地として、保護者とこどもの相互関係の充実
- ・心の安全基地を基盤として、こどもの愛着行動や探索活動の促進、拡大
- ・こどもの、保護者への信頼とこども自身の自己信頼（自己肯定感）の形成・充実

現状分析

- ・保護者が、自分のこどもの発達への理解が不十分
- ・保護者と保育者の見る目の違い
- ・家庭と保育所・幼稚園とでのこどもの行動の違い
- ・保護者の不安
- ・こどもとのかかわり方がわからない（愛情表現がわからない）保護者

取り組みの方向性

「保護者とこども」「保育者とこども」「保護者と保育者」の3者関係の充実

取り組みの方法

ふれあい遊びなどを通じた保護者とこどもの愛着形成支援
園生活における愛着形成に望ましい保育者の援助方法の研究
保護者支援のあり方

具体的な取り組み

- ・保護者とこどもの絆を深めるふれあい遊びの実践
- ・見つめ合う、目を見て話しかける
- ・抱きあげて声をかける
- ・応答的保育（特に言葉による）の実践
- ・こどもを信じて待つ

(2)実施プログラムの内容と評価

安治川保育園

1)プログラムの内容と振り返り

対象者	2歳児と養育者・保育者	
取り組みのねらい・期待される効果	2歳児は身体の成長につれ、「抱かれる」という行為が格段に減る。また、弟や妹が生まれると自分の存在が脅かされる経験を味わい、更には、内なる自我の芽生えが湧き起こってくる時期でもあり、心の中は決して穏やかにはいかないだろう。そのような中での保護者と子どもが1対1で抱き合うという行為で、自分は愛されている、大切にされているという感覚を味わうことができ、愛着関係を正常でかつ深い親と子の愛着関係へと導く。	
具体的な内容	<p>実施期間・・・8月～12月初旬 参加者数・・・2歳児 31名（A組14名、B組17名） 指導者・・・クラス担任 スケジュール</p> <ul style="list-style-type: none"> ・8月...『ハグしちゃお～』の歌遊びを用いて、お昼寝前に2歳児全員と1：1で抱き合う。（最初は担任と子どもだが、子ども同士、園長と子ども、主任と子どもなど応用していく。） ・9月...子どもたちが素直に（照れや戸惑いなく）受け止められるようになったらクラスだよりにて保護者へも提案する。（就寝前はどうか？） ・10月...実践する。 ・11月初旬...保護者実践の約1か月後、一人一人の意見を聞く為に保護者にアンケートを取る。 中旬...保育参観後のクラス懇談会の際、アンケート結果を含めて話し合う。 下旬...子どもの変化・保育者や保護者の変化など、トータルで見たまとめを報告書として文書にすることで振り返り、今後の実践をどう展開していくか考える。 	
留意点	<ul style="list-style-type: none"> ・入園・進級後の保育者と信頼関係ができてきた頃、更に関係を深める為に実践。 ・恥ずかしがる子どもに対しては、仲の良い友達と一緒に呼び、スムーズにハグ出来るようにしてみる。 ・自分から来られない場合（恥ずかしがるなど）保育者の方から無理なく徐々に誘っていく。 	
使用した教材	<ul style="list-style-type: none"> ・保育者が何度か耳にしたことのある歌を用いてアレンジする（後にドラえもんの曲だと分かるが、子どもたちにはドラえもんの歌の一部だという認識はなかった）。 	
今回の取り組みを通して見られた・感じられた変化	こども	<ul style="list-style-type: none"> ・消極的な子どもが、自分からよく養育者に話しかけたり、手を広げて走り、抱きつくようになる。 ・我を通していた子ども、泣いたらなかなか泣き止まない子どもが、素直な面を見せてくれたり、落ち着くのが早くなる。 ・午睡前になると「ハグタイムしよう！」と子どもたちの方から声をかけてくるようになる。

今回の取り組みを通して見られた・感じられた変化	養育者	<p>(保護者)</p> <ul style="list-style-type: none"> ・連絡帳に「ハグタイム」実施についてのコメントが記入されたり、「ハグタイム」を通しての送迎時の会話も生まれ、話すことも多くなる。 ・降園時にも抱きしめる保護者の姿が見られる。 <p>(保育者)</p> <ul style="list-style-type: none"> ・以前にも増してかわいさを感じられるようになった。 ・ハグしながら声をかけるため、こどものよい所、頑張った所などを考えることにより、よい面を見付けるよい機会になった。
アンケート調査や対象者の声、振り返り等から確認された変化	子ども	<ul style="list-style-type: none"> ・友達同士ですることにより、かかわりが少なかった子どもたちが仲良くなった。 ・ハグのスキンシップをすることにより、違った一面を見せてくれるようになり、抱きついて来てくれたり、自分の言葉でよく話をしてくれるようになった。 ・『これを頑張ったらハグしよう!』との声かけに、やる気を見せてくれ、励みになる部分もあった。
	養育者	<p>(保護者)</p> <ul style="list-style-type: none"> ・普段あまり接していない父親とのかかわりが深くなった。 ・ふれあうことにより、イライラと泣かなくなったり、わがママが減った。 ・兄弟、姉妹ともハグをする機会ができ、よい影響が出た。 ・コミュニケーションが増え、より一層近付けるよい取り組みだと思った。 <p>(保育者)</p> <ul style="list-style-type: none"> ・保育者との信頼関係が、より深くなった。 ・甘えも見られ、少しわがママも言うようになる。 ・スキンシップをすることで、違った一面が見られた。
取り組みに対する実施園側の感想		<ul style="list-style-type: none"> ・保育士との信頼関係がより深くなるだけでなく、友達同士ですることにより、かかわりが薄かった子どもたちたちが仲良くなった。 ・これをがんばったら、ハグしよう!と励みになることもあった。 ・ハグのスキンシップをすることにより、違った一面が見られるようになり、抱きついて来てくれたり、自分の言葉でよく話をしてくれるようになった。 ・よりかわいさを感じられるようになり、身近な存在になった。 ・信頼関係が深くなったが、甘えも見られるようになった。
今回の取り組みのよかったと思うところ		<ul style="list-style-type: none"> ・成長するにつれ機会が少なくなっていく「抱かれる」という行為を通して、お互いの信頼関係がより深くなったように思う。泣いたときには、自然と抱きしめ、落ち着く早さを実感した。保護者以外、クラス担任以外ともかかわりがもてるようになり、違う雰囲気にもスムーズになじめるようになったと思う。
今後の取り組み予定		<ul style="list-style-type: none"> ・よい影響が多く見られたので、今後は、乳児全クラスの午睡前のスキンシップとして続けていく。 ・家庭でも続けていけるのなら、クラスだよりなどで呼びかける。 ・幼児クラスでも、スキンシップの時間が取れるように工夫する。

今回のプログラムを活用するにあたっての提案	適切な実践時期	<ul style="list-style-type: none"> ・入所、進級後すぐより、新しい環境や保育者に慣れてからの実践の方がスムーズに行くと思われる。 ・クラスでの実践で、ハグタイムを恥ずかしがったり、嫌がることがなくなり、全員が楽しめるようになってから、おたよりなどで家庭への実践を呼びかけるとよい。
	取り組み内容	<ul style="list-style-type: none"> ・午睡前など、落ち着く時間帯に歌いながらリズムカルに行く。 <p>【保育者】『ハグタイム！』</p> <p>【こども】『イエ～イ！』</p> <p>【みんな】『 みんなでハグしちゃお！ ハグしちゃお～ パンパン《手拍子2回》 ハグしちゃお～ パンパン《手拍子2回》 く～ん（名前を呼ぶ）』</p> <p>ハグをする。（しながら、『 頑張ったね！』と言うこともあり）</p>
	予想される効果	<ul style="list-style-type: none"> ・自我の芽生えからの反発心が少なくなり、落ち着く。 ・スキンシップをすることで、信頼関係がより深くなる。 ・消極的なこどもも自然と心を開くようになる。 ・毎日続けることで、こどもから『ハグタイムしよう！』などの声が出る。 ・家庭でもしてもらうことで、愛着がより一層強まる。 ・兄弟、姉妹にもよい影響が出る。

（取り組みにかかる資料）

11月生まれのみなさん
おたんじょうび おめでとう

さくらみだより
11月号

11月は、どんな月かな？

10月は、何と云うお祭りかな？

11月のおたんじょうび

お知らせ

今日のうた
おんそよ

Hug! しちゃお!



えんちょうせんせいの

ドキドキ ドキュメント!!23

ほくもわたしもハグしちゃう!

さくら組さんで「ハグしちゃう!タイム」を設けています。お昼寝前に先生と子どもや、子ども同士でギュ〜ッと抱き合うのです。丁度いいタイミングで大阪市子ども青少年局より、保育研究の依頼を受け、このまま「ハグしちゃう」をテーマに取り組む事にしました。さくら組の保護者の皆さんには、アンケートのご協力など有難うございました。これから、全クラスに広げて行きたいと思っています。こんな小さな一つ一つが、これからの日本の子ども達の為、そしてそのご家族の支援になって行くといいな〜、と思います。

それにしても、スキンシップっていいものですね。ハグしている保育士や子ども達の幸せそうな顔…。毎日クラス全員の子どもの抱き締められるなんて、そうそうできないことなんです。それが「ハグしちゃうタイム」を設ける事によって、こんなにいと簡単に実現できるとは…って感じます。何を隠そう、この私も「今日は、園長先生とハグタイム!」のお呼びがかかるのを、今日か明日かと待つ日々なのです(*^-^*)



園長先生とハグしちゃう!

ハグタイムについてのアンケート

< ハグタイムに取り組んでみて、お子さんに何か変化が感じられたところ >

- ・あまり意識はしていませんでしたが、生まれた時からずっとハグしています。逆に「保育園でするハグしてみよー」というと、とてもはずかしい顔をしてノーコメントです。保育園では、変化があったのか教えて頂きたいです。
- ・お産が近いせいなのか、とても甘えるようになりました。(私以外の人にも)いつもべったりなのですが、最近はひどいように思います。
- ・ハグタイムの後は必ず「先生おやすみなさい」ですが、ハグタイムは寝るときでなく、ごはん中が多かったです。食事しながらいつも途中でひざに乗ってくるのでハグタイムで何が変わったかあまりわかりません。寝るときは時々「ハグしてー」と言っていました。また「ハグしましょ...ママおいでー」とハグしてくれました。
- ・目に見えての変化はあまりわかりませんが、ハグが大好きで他の人(兄や姉)にもやりたがります。
- ・以前から家でもハグしていましたが、園でするように一日に何回も笑顔で「お母さん大大大好き」とハグしてくれるようになりました。
- ・こどもの気持ちが少し変化したかな？ 身体全体でふれあえるので、よく笑って、イライラと泣かなくなってきたように思います。
- ・こどもがすごく嬉しそうで、わがママが少し減ったような気がします。お互いにニコニコできるからか、今まで以上にべったりさんになったような...
- ・お家では小さい時から「ギューして～」と言ってママやお姉ちゃんとギューをしていたのが、「ハグしよう！」と言った時はものすごく照れていて、はずかしがりながらしてくれました。
- ・前からお父さんよりお母さんでしたが、より「お母さんじゃないとダメー」というのが多くなったような。でもそれは、ハグタイムからなのかよくわかりませんが。
- ・いつも何かとバタバタしていて、気づくとこどもたちが先に布団に入って寝ていることが多かったので、歯磨きした後には名前を呼んでハグしています。どことなく、安心感を感じているような気がします。
- ・うちは、けっこういつも“ハグタイム”とは言わず、「むぎゅーは？」と言ってぎゅーとはしていました。急にやったのとは違って、保育園と家とでの二か所でもらえることができ、うれしかったと思います。家では上の子に見られない様にするので、その点保育園ではみんなの前でできるので、満足度UPだったのではないのでしょうか？
- ・初めの2～3週間は機嫌もよく、いつもよりママと一緒に遊んでくれていました。最近は“ハグタイム”をする前に戻りました。
- ・うちはパパとコロコロしている間に寝てしまうことが多く、ついつい忘れがちだったのですが、ちゃんとハグタイムをもったときは、やはりこどもも嬉しそうでした。
- ・家でもきょうだい(特にお姉ちゃん)にしがみついてハグするようになった。また、保育園の先生の姿を真似して「　　ちゃん、　　ちゃん」とハグしようの歌を唄いながらよくやっています。
- ・寝る前の一つのイベントとして、こどもの楽しみが増えたようです。最近は「ハグタイムやるよー」と先生風になっています。全体的には、少し甘えん坊になった感じがします。
- ・取り組み前は、父親のそばにばかり行き、母親にはあまり近寄って来てくれませんでした。取り組んでからは、母親にも甘えるようになりました。
- ・以前はなかなか寝つかなかったのが、ハグするとすぐに寝るようになりました。
- ・以前からしているので、はっきりした変化というのは分からないのですが...。反抗的な態度が減って素直な子になってきていると思います。
- ・普段わりとスキンシップをとっているせいか「ハグしよう！おいで！」と言ってもほとんど興味を示さず、きてくれませんでした。気分が向かないとダメみたいです。
- ・夜すんなり寝るようになった(就寝前のハグタイム)。感情的なときに「よ～し、落ち着こう！」とギュッとすると落ち着くようになった。朝も「おはよ～う！起きて～！」と体中をさすり、目が覚めたらギュッとしてリビングへ移動、玄関を出るときにも「頑張ろうか～！」とギュッとすると張り切って1日のスタートを切れるようになった。
- ・以前から寝るときにはタッチしながらスキンシップをはかっていたので、大きな変化というものを感じませんでした。

< ハグタイムに取り組んでみて、保護者の方に何か変化が感じられたところ >

- ・赤ちゃんのときは、ただ「愛してる～！」のハグでしたが、1歳を越える頃からは「たくさんしかってごめん～本当は大好きなのよ～」と反省の意も込めています。
- ・特にないです。一番下なので、かわいいと思うのは変わりないです。
- ・特に変わったという意識はありません。
- ・ハグする度に何とも言えない安心感を毎日感じられています。
- ・1日に何回も笑顔でハグしてくれるので私の方がこどもから元気ももらい、心がホッとできる時間になりました。
- ・1日の仕事を終えて、本当につらくイライラしたときでも、こどもとの“ハグタイム”でとても気持ちがやわらぎ、“ホッ”した気分になれる自分がいて…。あまりガミガミ怒らなくなりました。
- ・今まで以上にこどもがかわいいって改めて思ったこと。
- ・ハグをすることによって気持ちが落ち着くような感じがします。
- ・ハグタイムといっても毎日できていなかったのですが、するときには、今日この子のどこをほめようかなといいことばかり考えられたので、いつもよりもっとかわいく感じられていたと思います。
- ・親も安心感を得た。さらにかわいさを感じた。
- ・いつもしている分、あまりすごく変化があった様には思いませんでしたが、他のお母さん達もみんなやっているという楽しさがありました。他のお子さんもかわいく見えたり、けんかした後とかには、とてもいい仲直りの仕方だったり、いろいろ自分が感情的になるのをおさえてくれていた様な気がします。
- ・こどもに対して前より優しく接するようになった気がします。
- ・なんでもないときにそうしてハグタイムの時間をもつことで、普段は与えられていない部分の愛情を伝えられている気がしました。
- ・ハグしているときは、こどもの笑顔もニコニコですが、こちらの気持ちもニコニコになります。
- ・父は少し愛情が深まった気がすると言っていました。母は以前からハグはよくしていたので特別な変化は感じられませんでした。が、「ハグタイム」という日々の定番イベントが増えて、楽しい時間が一つ増えたことがよかったです。
- ・普段ついよく怒ってしまうのですが、ハグタイムになると気持ちの切り替えができ、こどものよい面を冷静に見てほめてあげることができました。
- ・お姉ちゃんや妹にもハグを求められるようになり、3人のこどもそれぞれとハグすることが楽しみになりました。
- ・こどもと抱き合うことで、こどもからの愛情も再確認できて、普段の接し方の悪いところを反省させられます。
- ・こどもの方からひざの上に座ってきたりしがみついたりしてきたときには、ぎゅーっとしてあげるようにしました。長い時間ぎゅーっとしていても意外に嫌がらず、むしろして欲しそうにおとなしくされるがままにじーっとしているので、すごく喜んでるんだと思います。
- ・時間に余裕をもつようになった。イライラ軽減です。

< ハグタイムに取り組んでよかったところ >

- ・親や親しい人(親の家族や友達)以外と気持ちのこもったハグができるのはよいと思います。他の人から受け止めてもらえるということは嬉しいですね。これからは気持ちのこもったハグをお願いします。
- ・一つ上のお姉ちゃんが見ていて「私も抱っこ」と言って来ます。「お姉ちゃんだから」と我慢させていたんだと今さらながら実感しました。たまにはお姉ちゃんも甘えさせてあげないとなーと反省しています。
- ・手をつないで眠ったり、眠れないときは「トントンしてー」といつてきたりということが多かったので、ハグタイムでの効果は不明です。
- ・忙しい日々の中で、こどもも母もほっとした時間をもてることです。
- ・一緒にいる時間が少ないのに家に帰ってから忙しく、こどものことをかまっていられないのですが、“ハグタイム”のときは短時間でも1対1で向き合えるのでよかったです。
- ・本当にこの“ハグタイム”をよく取り入れてくれたなと思っています。世界中でも“ハグしてください”というプレートをもち、町中で1人立っていますが、こんなにも自然でいてそれでやってみると何だか優しい気持ちになれる。これは先生方スゴイ事ですよ！本当にありがとうございました。
- ・こどもとふれあえる時間が多くなったこと。スキンシップって大事だなと改めて実感できた。

- ・最近はお姉ちゃんとケンカしてお互い気まづくなることが多いのですが、2人が落ち着いたときに「ねえねハグして」と言うと少し嫌がりながらもハグして仲直りのきっかけにもなっています。
- ・毎日ではありませんでしたが、するときは他の兄弟もやりたがって、順番にやっていたので、少し大きくなった上の子とも楽しめました。いつもよくこどもに抱きついていますが、これからもやっていけたらな～と思います。
- ・最近はだんだん抱っこすることが少なくなってきていたので、久しぶりにギュッとできたような感じがしました。お迎えのときもハグしようと思います。
- ・こどもも親も1対1のできるの、心で話しているみたいでいいと思います。家で怒られたりしたときも、園ではハグしてもらえるので、こどもにもほっとする時間ではないでしょうか…。これからはしてほしいです。
- ・ハグタイムをしたあとちゃんと寝るという意識をもってくれるみたいで、前よりもすんなり寝てくれるようになりました。
- ・下の子がまだ小さくて普段はどうしても下の子ばかり抱っこしてしまうので、上の子と触れあう時間がもてたのがとてもよかったです。
- ・親もこどもも最高に笑顔になれる瞬間です。意識してハグしたいな～と思います。そんなにハグできる時期も長いわけではないし、大切ですね。
- ・こどもとのコミュニケーションが増えてよかったです。
- ・こどもとの距離が一瞬にして近付けるよい取り組みだと思います。
- ・ハグすることが挨拶のように習慣となり、こどもたちも喜んでます。
- ・日中離れて生活しているので愛情を与えられるいい時間だと思います。
- ・この取り組みのおかげで前よりもスキンシップを意識をもつようになりました。こどもはやっぱりこれを望んでいたんだなと表情を見ると実感します。
- ・今までは仕事、家事、育児のフルコースで「さっさと寝なさい！」「さっさと起きなさい！」「ごはんを食べなさい！」「着替えなさい！」。私もこどももイライラしがちでしたが、わずか5分弱のハグタイムをつくることによってお互いにニコニコできています。今は仕事をしていないので時間にゆとりがあるけど、妊婦で身体がきかず、なかなか抱っこもしてやれず、イライラさせてしまっているけど、このハグタイム効果はすごいです。やっぱり密着して肌と肌のぬくもりが伝わると安心するんですね。普段はガマンさせてばかりなので、嬉しそうな顔をしているのを見ると改めて考えさせられます。これからは大事にしていきたい時間です。ちなみに兄(5歳半)にも平等にします。
- ・とても喜んでかけよって来ていました。

2) 講師によるプログラム評価と考察

本フィールドワークでは、「抱かれる」という行為が激減する2歳児とその保護者を対象に愛着関係の形成援助を目的としている。確かに、2歳児ともなると平均体重が10.4kg～13.4kgとなり、10kgを越えるこどもを抱くのは相当重たく感じる。完全に抱きあげる機会がどうしても激減してしまうのも理解できる。特に、女性の体力では厳しくなり、下のこどもを妊娠しているとなればなおのことである。

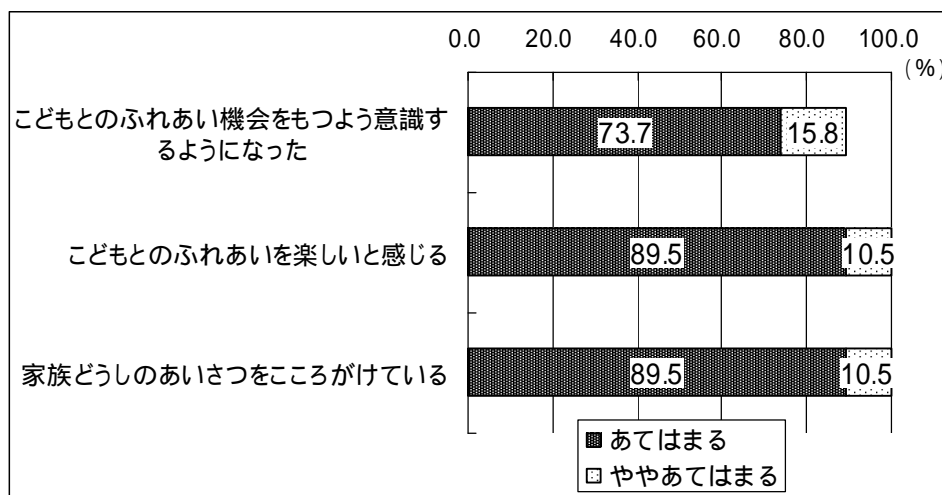
また、2歳児という時期の発達の状態としては、自我が発達して自己主張が強くなり、自分で決めたり、自分でしようとするがまだ思い通りにいかないことが多く、反発したりかんしゃくをおこしたりする。その一方で、泣いている友達をなぐさめたり、自分より小さいこどもに愛情を示したりと相手の気持ちを察して思いやる力がはぐくまれる時期でもある。そして、模倣が盛んになり大人とのごっこ遊びを楽しむことができるようになる。そのような発達の特性をうまくとらえ、自我が芽生える難しい時期であるにもかかわらず、非常に自然体で無理のない実践が展開されている。例えば、「留意点」にも記載されているが、2歳児の特性を踏まえ、恥ずかしがるこどもには仲の良い友達と一緒にするようにしたり、保育者(大人)が率先して実践してみせたり、2歳児クラスのこどもたちにとって親しみのあるメロデ

ィーをアレンジしたりというような配慮がなされている。

さらに、まずは園生活において保育者と子ども、子どもと子どもが実践し、定着した頃に家庭を巻き込んでいくという段階的な展開の仕方も効果を高める結果となっている。アンケート調査の結果からも明らかであり、約9割の保護者がふれあいの機会をもつよう意識するようになっており、ふれあいを楽しめないと感じる養育者は一人もいなかった。報告シートの「今回の取り組みを通して子どもや養育者に見られた変化」や「アンケート調査や対象者の声、ふりかえり等から確認された変化」の欄に記載されているように、保護者の変化からだけでなく、子どもの変化からも取り組みのねらいが着実に達成されていく様子が伺われる。具体的には、

- ・自我の芽生えからの反発心が少なくなり、落ち着く。
- ・スキンシップをすることで、信頼関係がより深くなる。
- ・消極的な子どもも自然と心を開くようになる。
- ・毎日続けることで、子どもから『ハグタイムしよう！』などの声が出る。
- ・家庭でもしてもらおうことで、愛着がより一層強まる。
- ・兄弟、姉妹にもよい影響が出る。 などである。

フィールドワークに対する保護者アンケート調査結果



継続性の視点から

この取り組みを通して保育者にも変化があらわれている。子どもを中心に、子ども同士、子どもと保護者、子どもと保育者、保育者と保護者というように、多様な関係性においてプラス効果が確認されている。

保護者への啓発のタイミングもよく、また呼びかけ方としてもまずは保育園で取り組み、それによる変化として子どもたちとの関係がさらに深まったということを伝えていて、保護者の関心を引き出している。また、『クラスだより』や『えんちょうせんせいのドキドキキュメント』などをうまく活用して、無理のないそしていねいな方法で保護者の気づきを促す試みを平行して行っており、是非とも継続していただきたい。

今後の取り組み予定として幼児クラスでの展開を検討されているが、ここでの経験を踏まえて展開方法等を工夫し、ますます充実させていっていただきたい。

西大道保育所

1) プログラムの内容と振り返り

対象者	保育所在所児（0、1歳児）とその保護者	
取り組みのねらい	保護者が、保育所でこどもと一緒に「ふれあい遊び」を実践したり、「愛着関係について」の講演を聞き、こどもとふれあう楽しさを実感したり、子育ての工夫や大切さに気付き、日々の子育てで意識的にこどもとかわろうとすることで、親子の愛着関係をはぐくむ。	
具体的な内容	<p>保護者参加の参観の取り組み</p> <p>日程： 10月29日（水）</p> <p>対象： 0、1歳児親子</p> <p>内容： 「愛着関係について」中西先生の講演を聞く。 親子でふれあい遊びを楽しむ。</p> <p>時間： 9:00～10:00＜講演を聞く＞ 10:00～11:00＜ふれあい遊び＞</p> <p>参加数：計33名（対象保護者21世帯中19世帯23名 2～5歳児保護者10名）</p> <p>その後の取り組み</p> <p>「にこにこカード」</p> <ul style="list-style-type: none"> ・保護者に日々のこどもとのふれあいの中から気付いたことや、こどもの成長の喜びや共感したことを、いつでも書いてもらえるように、「にこにこカード」と専用の箱を設置する。 ・「にこにこカード」をクラスで掲示し、他の保護者にも見せもらう。クラスだよりにふれあい遊びを掲載する。生活発表会でクラスごとに親子でふれあうプログラムを入れる。 <p>これからの取り組み</p> <ul style="list-style-type: none"> ・「にこにこカード」を個人ファイルにして閉じ、進級してももちあがっていく。 ・「にこにこカード」の掲示板を他の保護者や保育士との意見交換の場にしていきたい。 	
留意点	講演を先にしたことで、保護者はより意識してこどもとふれあうことができた。	
使用した教材	中西先生の講演の資料 「ふれあい遊び」の資料	
今回の取り組みを通して見られた・感じられた変化	こども	<ul style="list-style-type: none"> ・こどもが心身ともにリラックスして大人を受け入れ、ふれあうことを喜び自己を発揮するようになる。 ・保護者と保育士がより連携することでこどもも安心して保育所生活を楽しむようになる。
	養育者	<p>（保護者）</p> <ul style="list-style-type: none"> ・こどもの目線に立とうと意識をするようになる。 ・紹介したふれあい遊びを家でも実践する。 ・講演を聞いた父親のこどもへの接し方がいいなくなった。 <p>（保育者）</p> <ul style="list-style-type: none"> ・同じ場や時間を共有したことで親交が深まった。 ・自分たちの保育の振り返りにもつながった。 ・保護者とともに子育てをしていこうという意識が強くなった。

アンケート調査や対象者の声、振り返り等から確認された変化	こども	<ul style="list-style-type: none"> ・自分からふれあいを催促したり甘えたりするようになる。 ・家でもふれあっている様子が伺える。
	養育者	<p>(保護者)</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ふれあい遊びを家でもよくするようになる。 ・ていねいにこどもとかかわるようになる。 <p>(保育者)</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ふれあい遊びを多く保育に取り入れ意識してかかわる。
養育者の声の概要		<ul style="list-style-type: none"> ・親子で楽しい時間を過ごせた。 ・ふれあい遊びの楽しさを親子で味わえた。家でもやろうと思う。 ・これからは、こどもの目線になって一緒に楽しい時間を過ごしたい。 ・自分の子育てに自信がなかったのが、よい参考になった。 ・講演を聞いてお父さんの接し方がていねいになった。 ・講演を聞いて、日々忘れてしまいがちなことを思い出すことができた。意識してかかわることの大切さを感じた。 ・いろいろなふれあい遊びを知ることができてよかった。
取り組みに対する実施園側の感想		<ul style="list-style-type: none"> ・保護者と一緒に数人の保育士が講演を聞いたことで、話の内容や思いも共有することができた。 ・講演を聞いてからふれあい遊びをしたので、保護者のこどもに対する思いも少し違ったものになっていたのがよかったと思う。 ・この時期にしたことで親同士も和気あいあいと、こどもととても楽しんで遊んでいる姿が見られた。 ・急な日程、平日にもかかわらず、たくさんの保護者の参加もあり、こどもに目を向けてかかわろうとしていることがよくわかった。今後私たち保育士もしっかりかかわっていかなければいけないと思った。
今回の取り組みのよかったと思うところ		<ul style="list-style-type: none"> ・保護者も一緒に楽しんで興味をもってもらえた。実際に家でもしてみたという声が聞かれる。 ・保育士とはまた違う立場の人の話しを聞いたことで、改めて親子でふれあうことの大切さを感じてもらえたと思う。
今後の取り組み予定		<ul style="list-style-type: none"> ・いろいろな機会にふれあい遊びを提供していく。 ・「にこにこカード」の継続。 ・親子の愛着形成を援助する取り組みを意識してする。
今回のプログラムを活用するにあたっての提案	実践時期	<ul style="list-style-type: none"> ・今年度は後半になってしまったが、保育所に慣れてきた6月頃から継続して取り組むとよいと思う。
	取り組み内容	<ul style="list-style-type: none"> ・継続的に愛着形成をテーマに取り組む。
	予想される効果	<ul style="list-style-type: none"> ・親子の愛着形成がはぐくまれ、こどもたちが安定して生活できる。

10月29日に実施したフィールドワークの内容は次の通りである。

たんぼぼ・ちゅうりっぷぐみ参観デイリー

ねらい	* お家の人と一緒にふれあい遊びを楽しむ		
時間	活 動	援助及び配慮	環境・他
<p>～</p> <p>9:15</p> <p>9:20</p> <p>9:50</p>	<p>順次登所し検温、視診、などをすませる</p> <p>好きな遊びを見つけて遊ぶ ままごと・ブロック・絵本 その他</p> <p>* 保護者は3歳児室にて講演会 (9:20~10:10)</p> <p>おもちゃを片付ける</p> <p>歌を歌う おはようのうた おいもごろごろ おおきなくりのきのしたで</p> <p>手洗いをして自分の席に座る</p> <p>エプロンをつける</p> <p>「おやつのうた」を歌いいただきますをする おやつと牛乳を食べる</p> <p>食べ終わったらごちそうさまをし、おしぼりで口・手を拭きロッカーに片付ける</p> <p>排泄をする</p> <p>体操をする ちびっこまんたいそう がけの上のポニョ 他</p>	<p>検温が終わったら視診、家での様子などを聞き個々の体調を把握する</p> <p>遊びのコーナーへ誘い、遊びを見つめられるように誘ったり、一緒に遊んだりする</p> <p>* 保護者には3歳児室に移動してもらうように声をかける</p> <p>・片付けの声かけをしながら、片付ける場所を知らせたり、一緒に片付ける</p> <p>・いすに座るよう声かけし、こどもたちからよく見える場所に座り歌い始める</p> <p>・こどもの反応を見たりやり取りをしながら楽しく歌う</p> <p>・手洗いの時には、水道・タオル掛け・机に分かれて危険のないように見守りながら、声かけしたり補助をする</p> <p>・名前を呼びながらエプロンを配り、つけるように声かけする</p> <p>・全員がエプロンをつけたら「おやつのうた」・いただきますをし、おやつを配る</p> <p>・量は個々に応じて加減する</p> <p>・食べ終わったら、食器を片付けたりおしぼりで拭いて片付けるように声かけし、できないところは補助しながら一緒にする</p> <p>・トイレに誘い、そばについて危険のないように見守りながら、出たときには誉め自信へとつなげる</p> <p>・パンツ・ズボンは補助しながら着脱の方法を知らせていく</p> <p>・保育士も一緒に楽しみながら、こどもたちにも身体を動かす楽しさを知らせていく</p>	

<p>10:15</p> <p>10:45</p>	<p>絵本を読む</p> <p>お家の人と一緒に遊ぶ 一本橋こちょこちょ ろめんでんしゃ きゅうりもみ どっちどっちえべっさん おいものてんぷら</p> <p>布遊び いないいないばあ ももやももや ことりことり</p> <p>絵本を読む ・はらぺこあおむし</p> <p>排泄・昼食準備をする</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・いすに座るように促し、みんなからよく見える位置に座り読み始める ・こどもたちの様子や反応を見ながら読んでいく ・保護者にこどもたちのところへ行ってもらうように声をかける ・なるべく広く使えるように、狭いようなら畳コーナーだけでなく、床のスペースも使うようにする ・保護者が来ていないこどもは、保育士と遊ぶ ・分かりやすく説明したり、見本を見せながら一緒に楽しめるようにする ・様子や反応を見ながら、家でも楽しんでもらえるように、ひとつの遊びを何度か繰り返す ・0、1歳児一緒にみんなが見やすい場所に移動してもらう 	
---------------------------	---	--	--

(取り組みにかかる資料)

ふれあいあそび参観

ご参加ありがとうございました！
出席できなかった方も、是非おうちであそんでみてくださいね。
子供たちはふれあいあそびが大好きです♪ ふと歌声が聞こえてくると集まったり寝転がって準備万端だったり・・・
「音程を忘れた！」「どうやって遊んだっただかしら・・・」そんなときはいつでも声を掛けてくださいね。何度でも歌わせていただきます！！
また、お子さんに尋ねてみるのも良い方法かもしれません。きっと小さな先生になって歌ってくれることと思います♪
お部屋に“にこにこカード”とポストを用意しています。ふれあい遊びをお家で試してみせてくれた可愛い姿、感じたこと、楽しいエピソード・・・などなど、なんでもかまいません。色々な声を聞かせてください！ お待ちしています！！



ふれあい あそび

10月29日 西大道保育所

「一本橋こちよこちよ」
いっぽんばし こちよこちよ
たたいて つねって なぜて
かいたんのぼってすべって
うらからまわって
こちよこちよこちよ

「ろめんでんしゃ」
ろめんでんしゃに〇〇ちゃんをのせて
いまにおちるよ いまにおちるよ
すととーんとん



「きゅうりもみ」

きゅうりができた ×3 さあたべよ
しおふって ぽっばぽ ×3 ぽっばぽ
ころがして ごろごろ ×3 ごーろごろ
おみずで じゃあじゃあ ×3 じゃあじゃあじゃあ
ほうちようで とんとんとん ×3 とんとんと
いただきます。こちよこちよこちよ



「どっちどっち」
どっちどっち えべっさん
えべっさんにきいたら わかる
さあ～どっち



「ことりことり」
ことりことり
あっちのやまえ
とんでいけ～

「ももや」
ももや ももや ながれは はやい
せんたくすれば きものがぬれる
あ～どっこいしょ





「にこにこカード」

保護者に日々のこどもとのふれあいの中から気付いたことや、こどもの成長の喜びや共感したことを書いてもらい、専用の箱に投函してもらう(いつでもよい)。

後日、「にこにこカード」をクラスで掲示し、他の保護者にも見ってもらう。



2) 講師によるプログラムの評価と考察

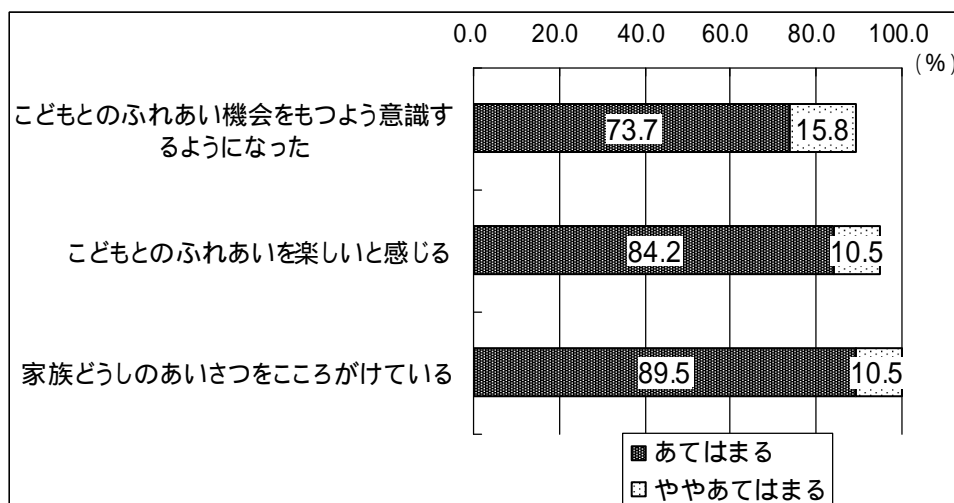
本フィールドワークでは、一番低年齢児クラスである0、1歳児とその保護者を対象としている。「ふれあい遊び」が人と人とをつなぐツールとして有効であることは「就学前児童健全育成プログラム策定にかかる中間報告書(平成19年度)」でも述べられている。しかし、「ふれあい遊び」が親子の絆の形成に有効であるとはいえ、実際保護者が日常生活の中で気軽に実践する機会を増やすため、意識改革をどのように行っていくかはなかなか難しい課題である。この課題に取り組んだ西大道保育所のフィールドワークは、限られた期間であったにもかかわらず確かな成果をあげている。

まず、限られた時間で効果的な取り組みを実施するために、その第一段階としてフィールドワークの統括者が勉強会に参加し情報収集を行っている。具体的には、養育者との愛着形成をテーマにフィールドワークを実施するにあたり「今どきの子育て事情」や「共感性の育成(かかわりの質を高めよう)」などについて講話を聞き、親子の愛着形成支援のあり方につ

いて検討を行っている。その結果、講師が直接保護者に対して講演（勉強会）を行うという教材を活用し、その直後に実践する「ふれあい遊び」の取り組みがより充実するよう、数名の保育士も保護者とともに聴き、保護者の意識が高まることと同時に保育者の意識も高まることをねらい、両者の意識が高まった状態で、保育室において保育者主導での親子のふれあい遊びを行うというデイリープログラムを用意している。活動の流れは同じ実践を行うにしても、その成果に影響を及ぼすのでよく考えられたプログラムである。

以上のような取り組みにおいて、子どもや保護者、保育者に見られた変化は報告シートに記載された通りで成果が確認されている。アンケート調査からも、子どもとのふれあいの機会を意識的にもつようになった保護者が全体の9割近くを占め、ほとんどの保護者がふれあいを楽しいと感じているという結果が出ている。

フィールドワークに対する保護者アンケート調査結果



継続性の視点から

以上のような取り組みに、さらに「にこにこカード」を導入することにより、子どもの成長の喜びや共感をフィードバックすることが可能になっている。それは、親としての発達を促し、親としての自己肯定感を高めることにもつながっている。子育ては親としてきちんとやって当たり前という意識が払拭されない中、子育ての評価や達成感はフィードバックされにくい。「にこにこカード」を活用することにより、自分自身の子育てを見直したり、これでいいんだという安心感や子育てが楽しいと思える機会が得られ、愛着関係をはぐくむだけでなく子育て全般の質の向上につながるであろう。

生魂幼稚園

1) プログラムの内容と振り返り

対象者	在園児とその保護者（3，4，5歳児）	
取り組みのねらい	<ul style="list-style-type: none"> ・こどもとの接し方や会話を振り返ることによって、こどもの気持ちに気付き、強い絆をつくったり、親の愛着を感じたりして、健全な親子関係を築く。 ・こどもの保護者への信頼感と自己肯定感を形成する。 ・家庭や園で親子のふれあいタイムを設け、親子でふれあう楽しさを十分味わわせる。 ・幼児期における親子の愛着形成の必要性を理解した上で、家庭で親子のふれあいのひとときを意識的にもつようになる。 	
具体的な内容	<ul style="list-style-type: none"> ・毎月の園だよりや保護者会（9/30）において、「親子の愛着について」の趣旨説明を行う。 ・毎週金曜日に各保育室で、「ふれあいタイム」を行う。（わらべ歌・伝承遊び・童謡を聴いたり、歌ったりするなど。（10分間）） ・運動会で親子競技をする。（10/11 72名 3歳児は箱を積み上げる。4歳児はキャタピラを使って競争する。5歳児は帽子についたしっぽを取り合う） ・作品展で親子製作をする。（11/22 70名 牛乳パックを使って、パクパク人形をつくる。できたパクパク人形で対話をしたり、歌を歌ったりする） ・ふれあいコンサートをする。（11/26 70名 保護者31名 脇田茂子先生 第1部は園児・未就園児・保護者対象で親子で歌おう 第2部は保護者対象で童謡・唱歌を歌う） ・アンケートを実施する。（運動会・作品展・大阪府国公立幼稚園長会外部評価・親子の愛着 12/12） ・リーフレット「親子で楽しくパワーアップ」（全国国公立幼稚園長会編集）を活用する。（10/31 配布。提出は3週間後に自由に） 	
留意点	<ul style="list-style-type: none"> ・短時間でも継続して行うことで、期待される効果が表れてくる。 ・わらべ歌・伝承遊びなどは、保護者が「なつかしい」「知ってる」「簡単そう」と思われる手軽なものから取り入れ、家庭に持ち帰ってできる内容が望ましい。 	
使用した教材（資料）	<ul style="list-style-type: none"> ・わらべ歌・仲良し遊び・伝承遊び 「げんこつ山のたぬきさん」「肩たたき」「お寺のおしょうさん」「やきいもグーチパー」「つけもの」「ぴったんこ」「エスカレーター」「なべなべそこぬけ」など ・唱歌・童謡 「親子で歌いつごう 日本の歌百選」より ・リーフレット「親子で楽しくパワーアップ」 	
今回の取り組みを通して見られた・感じられた変化	こども	<ul style="list-style-type: none"> ・ふれあいタイムは、当初は、保護者もこどももぎこちなかったり、ふざけたりする行動が目についたりすることもあった。回を重ねるに従って、保護者の前で素直な自分を出すことができ、対面してふれあい遊びができるこどもが増えた。 ・親子でする遊びを前もって保育室で友達と一緒にすることで、より楽しみ方がわかり、期待感をもって参加できた。

<p>今回の取り組みを通して見られた・感じられた変化</p>	<p>養育者</p>	<p>(保護者)</p> <ul style="list-style-type: none"> ・活動を通して、保護者をほめるとこどもも嬉しい、また、保護者も素直に受け止めて喜ぶなど温かい雰囲気生まれた。 ・表情が硬かったり、遅れて来たり、思うように活動しないこどもへの声のかけ方がわからない様子の保護者にも少しずつではあるが、協力的な態度や変化が見られた。 <p>(教師)</p> <ul style="list-style-type: none"> ・「ふれあいタイム」の実践メモをとることで、親子の変容や保護者の声をとらえ、次の活動内容を考える上で役立った。 ・いろいろな行事を親子の愛着に着目して工夫した。
<p>アンケート調査や対象者の声、振り返り等から確認された変化</p>	<p>こども</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・ふれあい遊びを親子でする中で、心も体も開放して楽しむ姿や笑顔がたくさん見られた。 ・「今日は何をするのかなー」「この歌、おかあさんに聴いてもらいたい」などと、ふれあいタイムに期待する声が聞かれた。
<p>養育者の声の概要</p>	<p>養育者</p>	<p>(保護者)</p> <ul style="list-style-type: none"> ・他の親子の様子を見たり、話を聞いたりして、親同士が親子関係について振り返ることができた。 ・取り組みに対するアンケート結果より、設問、設問、設問のいずれも「あてはまる」「ややあてはまる」の項目に該当する方が多かった。(回収率 89.4%) <p>(教師)</p> <ul style="list-style-type: none"> ・いろいろな親子関係をじっくり見ることで、「親が変われば、こどもは変わる」という親育ちの視点から、今後の指導の参考にできた。
<p>今回の取り組みのよかったと思うところ</p>		<ul style="list-style-type: none"> ・ふれあいタイムのなかでのこどもの表情や様子から、よりこどもがかわいいと思えたり、スキンシップが自然な形でできたりして、親子関係に何が大切であるかを考える機会になった。 ・園内だけでなく、家庭に持ち帰って、親子のふれあいのひとときをつくることを、意識的にするためのきっかけづくりになった。 ・他の親子の様子を見たり、話を聞いたりして、親同士が親子関係について振り返ることができた。

取り組みに対する実施園側の感想	<ul style="list-style-type: none"> ・いろいろな親子関係をじっくり見ることができた。「親が変われば、こどもは変わる」という親育ちの視点から、今後の指導の参考にしたい。 ・保護者の興味や関心を探るのに、多少時間がかかった。「なつかしい」「知ってる」「簡単そう」と思われる内容のものが親子も教師も楽しめた。 ・保護者の声(本音)をどこまで聞くことができたかはまだまだ難しいと思われる。 ・リーフレットの活用についての結果が楽しみである。 ・双子・きょうだい関係・預かり保育参加者など、配慮しなければならない保護者とこどもへの援助の仕方について検討する必要がある。 	
教材等において改良すべき点	<ul style="list-style-type: none"> ・ふれあい遊びに適した曲や遊び方など、教材研究を行う(年齢に応じたもの、家庭でもできるもの、家族で楽しめるもの)。 ・双子・きょうだい関係・預かり保育参加者など配慮しなければならない保護者とこどもへの援助の仕方について検討する。 	
今後の取り組み予定	<ul style="list-style-type: none"> ・毎月の園だよりにより各組の実態を記載する。 ・毎週金曜日に「ふれあいタイム」を行う。 ・生活発表会で、保護者と一緒に歌を歌う。「にんげんっていいな」(手話つき) 	
今回のプログラムを活用するにあたっての提案	実践時期	<ul style="list-style-type: none"> ・通年(毎週1回) ・保護者が参加しやすい時間帯 ・1回の活動時間は10~15分くらい
	取り組み内容	<ul style="list-style-type: none"> ・年間指導計画に位置付け、計画的に実施する。 ・従来からの行事とのからみを考えて、行事を増やすのではなく、内容を吟味し、検討する。 ・ひとつの遊びから、バリエーションを加えたものへと広げていくよう工夫する。
	予想される効果	<ul style="list-style-type: none"> ・健全な親子関係を築く上で、保護者はこどもとの絆を強くし、こどもがかわいいとより思うことができたり、こどもからは保護者との愛着を深く感じることができる。

(取り組みにかかる資料)

親子のふれあいタイム実践紹介

	5歳児	4歳児	3歳児
9/19	<ul style="list-style-type: none"> ・「トンボのめがね」「ぼんぼこたぬき」「虫の声」の課題曲を歌う(楽譜配布) ・地域のおとしよりの集いでしたことを披露しながら、親子で遊ぶ(「頭の上でパン」「肩たたき」「むすんでひらいて」) 	<ul style="list-style-type: none"> ・「トンボのめがね」を歌う(課題曲として設定し、楽譜配布) ・「大きなくりのきのしたで」の親子ダンスをする ・「どんぐり」手遊びの速さ競争を親子でする 	<ul style="list-style-type: none"> ・保護者にいすに座ってもらい、ひざの上に抱っこしてもらう ・ひざの上に前向きに抱っこしてもらい、一緒に「ぼんぼこたぬき」を歌う ・保護者の前に立って「ぼんぼこたぬき」を歌う
9/26	<ul style="list-style-type: none"> ・「虫の声」を一緒に歌う ・大阪市立幼稚園音楽会の歌を聴いてもらう ・「げんこつ山のためきさん(ジャンケン遊び)」をする 	<ul style="list-style-type: none"> ・「やきいもグーチーパー」「お寺のおしょうさん」でジャンケンゲームをする ・「おいもごろごろ」の歌を聴いてもらい、親子で歌う 	<ul style="list-style-type: none"> ・「やきいもグーチーパー」をする ・こどもたちと教師でする ・親子でする

	5歳児	4歳児	3歳児
	・「肩たたき」「エスカレーター」など 勝った人、負けた人に分かれて ふれあい遊びをする		
10/3	・親子競技の練習(おんぶをして しっぽとり(帽子))をする ・「腰たたき」「肩たたき」をする ・「うんどうかいのうた」を一緒に 歌う	・中央図書館の本を親子で選 び、借りる ・ふれあい遊び「つけもの」をする ・「うんどうかいのうた」を一緒に 歌う	・「うんどうかいのうた」を一緒に 歌う ・親子競技の「地球を回せ」の 曲で親子で踊る
10/10			・翌日の運動会についての話を 聞く ・「うんどうかいのうた」を歌う
10/17	・親子でダンスをする「ラララこん にちは」(ペアが変わっていくダン ス) ・「エスカレータ」(両手人差し指で 相手の体をツツツン刺激して 上ったり、下りたりする) ・「おちばのゴーゴーゴー」でかけ合 いの歌を歌う	・「ぴったんこ」を親子で踊る	・親子でとなり同士でいすに座 る(預かり保育に参加することも が多く、降園時は9名) ・運動会の話をする ・「げんこつ山のためきさん」をす る
10/31	・中央公会堂で歌った歌を聴 いてもらう「森のファミリーレストラ ン」「くりの木山のキツネ」手遊 びを一緒にする	・こどもが寝ころんで、保護者が あお向けにひっくり返す ・ザリガニの親子になって表現遊 びをする ・「あららコアラ」の歌を聴いてもら う	・親子でとなり同士でいすに座 る(降園時は7名) ・「親子のふれあいあそび」のリー フレットを配り説明する ・「なべなべそこぬけ」をして遊ぶ
11/7	・あと出しジャンケンをする 先に保護者が出て、後でこ どもがそれに勝つように出す 先と後を交代してする 先に出したものに負けるよう にあと出しジャンケンをする ・「おちばのゴーゴーゴー」でかけ 合いの歌を歌う	・「ちびっこおばけをつかまえる」 のダンス(ダンスの中でいろいろ なかかわりをする)をする ・中央図書館の本を保護者が こどもに選んであげる	・「どんぐり」の歌を歌ったり、動 きを楽しむ ・「お寺のおしょうさん」をする ・ジャンケンをして勝ったら「高い 高い」をしてもらう
11/14	・保護者が座って足を伸ばして 開いたり閉じたりする、こども はとぶ(体操) ・二人で手遊びをする(「お寺の おしょうさん」「アルプス一万尺」 ・「山の音楽家」を聴いてもら う、目を見て一緒に歌う	・「にんげんっていいな」の歌を親 子で歌う ・「エスカレーター」のふれあい遊びを する	・「どんぐりころころ」の歌を歌い、 聴いてもらう ・「いないいない ばぁー」をする 「ばぁー」のところは、両手を 上・横・下に移動する

ふれあいタイムの様子



ふれあいタイム
親子でふれあい
遊びをする

(4歳児)



(5歳児)

親子競技
親子で競技(運動会)



(3歳児)



親子製作
親子でぱくぱく
人形を作る
(作品展)

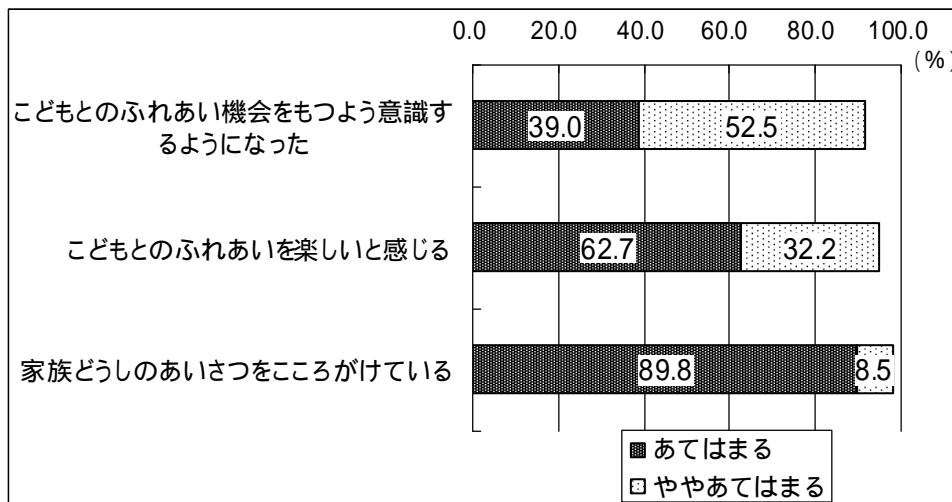


2) 講師によるプログラム評価と考察

本フィールドワークは、多角的なプログラムが立案されており、一見すると行事が多いような印象があるが、実はそれらは幼稚園の特性を上手く生かした計画であるため、それぞれが有機的に統合し有効に機能しているといえる。

活動の目的が明確であり、園だよりや例年の行事、リーフレットなどを上手く活用し、保護者への啓発や周知もていねいに実施されている。特に「親子のふれあいタイム」は降園時の場を活用して、保護者参画型の活動に展開できている。『家庭や園で親子のふれあいタイムを設け、親子でふれあう楽しさを十分味わわせる』というねらいを実践する場としては最適である。報告シートにも記載されている通り、降園時の場を利用するので短時間ではあるが、毎週継続して実施できるため、継続性や日常性、手軽さなど、ねらい達成のためのステップ（手段）としての条件を整えているといえる。実際、継続すること、そして教材を工夫することなどを通して子どもや保護者に以下のような肯定的な変化があらわれており、さらに保育者にもねらいの達成だけに終わらず、保育の質の向上につながるような成果が確認されている。

フィールドワークに対する保護者アンケート調査結果



(子ども)

- ・ふれあいタイムは、当初は、保護者も子どももぎこちなかったり、ふざけたりする行動が目についた。回を重ねるに従って、保護者の前で素直な自分を出ことができ、対面してふれあい遊びができる子どもが増えた。
- ・親子とする遊びを前もって保育室で友達と一緒にすることで、より楽しみ方がわかり、期待感をもって参加できた。

(保護者)

- ・活動を通して、保護者をほめると子どもも嬉しい、また、保護者も素直に受け止めて喜ぶなど温かい雰囲気生まれた。
- ・表情が硬かったり、遅れて来たり、思うように活動しない子どもへの声のかけ方がわからない様子の保護者にも、少しずつではあるが、協力的な態度や変化が見られた。
- ・他の親子の様子を見たり、話を聞いたりして、親同士が親子関係について振り返ることができた。

(保育者)

- ・「ふれあいタイム」の実践メモをとることで、親子の変容や保護者の声をとらえ、次の活動内容を考える上で役立った。
- ・いろいろな行事を親子の愛着に着目して工夫した。
- ・いろいろな親子関係をじっくり見ることで、「親が変われば、こどもは変わる」という親育ちの視点から、今後の指導の参考にできた。

継続性の視点から

「ふれあいタイム」は、年間指導計画に位置付け実施を継続することであり、これだけの成果があらわれてきているので今後の展開が楽しみである。取り組み内容についてはすでに検討されているようだが、遊びのバリエーションの加え方なども取り入れ工夫することにより、本来の短時間で手軽に続けられるというメリットを生かし続けてほしい。

また、「親子のふれあいタイム実践メモ」も継続して記録されており、今後の内容の展開などを検討するにあたり、この記録は貴重な実践資料となるであろう。

一方、継続にあたり、兄弟姉妹のいる場合の保護者への対応 預かり保育のこども(家庭)への対応をどうするかというような課題も出てきた。

八幡屋保育所 港地域子育て支援センター

1) プログラムの内容と振り返り

対象者	センター来館の親子	
取り組みのねらい	<ul style="list-style-type: none"> ・日々の朝夕の「あいさつ」と同時に抱きしめる行動を通して親子のつながりをつくる。また、「あいさつ」だけでなく気持ちを言葉で伝えていき、親子関係を深めていく。 ・学生との交流を通して自分のこどもの姿に触れたり気付いたりする。 	
具体的な内容	<ul style="list-style-type: none"> ・センターの中に「あいさつしよう!」のポスターを掲示啓発し、あいさつだけでなく気持ちを言葉で伝えることの大切さを伝えていく。 ・ひろばや親子教室に来館してくる親子に、目と目を合わせ抱きしめて話す、気持ちを伝えるなど具体的なかかわり方を声かけしていく。 ・学生(子育ての経験がない学生)が子どもと一緒に遊び、「きらきらメール(子どもたちが遊んでいる姿を見て感じたことをカードに書く)」を渡し、親にこどもの姿を伝えていく。 <p><実施日時など></p> <ul style="list-style-type: none"> ・10月初旬より、センターのスタッフが月曜日から金曜日のひろばと親子教室の中で声をかけ、伝えていった。 ・10月27日より毎週月曜日(10:30~12:00)4名の学生により、3~10組の親子とのかかわりをもった。 	
留意点	<ul style="list-style-type: none"> ・日頃のかかわりを認め受け止めた上で、取り組み内容を伝えるときには、押し付けにならないように、具体的な内容や状況をわかりやすい言葉で伝えていく。 	
使用した教材	<ul style="list-style-type: none"> ・絵本(あいさつ、言葉かけ、ふれあいにかかわる絵本など) ・腹話術の人形 	
今回の取り組みを通して見られた・感じられた変化	こども	<ul style="list-style-type: none"> ・親の声かけで親子と一緒に「おはよう」「さようなら」のあいさつを意図的にしようとしている姿が見られた。 ・学生とのかかわりの中で、人見知りをして母親に頼る姿が見られたり、反対に泣くだろうと思う親の予測と違い、すんなりかかわってもらっていたりしていた。
	養育者	<p>(保護者)</p> <ul style="list-style-type: none"> ・改めて日々の言葉かけ(「あいさつ」を含む)の大切さ、気持ちを言葉で表わすことの大切さに気付いたとの声があった。 ・学生とのかかわりを通して我が子を見直したり、自分(母親)との絆を実感したりし、今の親子のかかわりを肯定的に感じている姿が見られた。 <p>(保育者)</p> <ul style="list-style-type: none"> ・子育て支援センターが具体的な取り組みを積極的に提案していくことも必要なことであると感じた。 ・愛着形成の取り組みは日常的に気長に身構えず取り組んでいくことが必要であると感じた。

アンケート調査や対象者の声、振り返り等から確認された変化	こども	<ul style="list-style-type: none"> ・母親と一緒に取り組みに参加したことで、親が絆を感じたと同様、こどもも母親との関係に満足し、安定したかかわりをもつようになった（例えば、今まで自分の母親ではなく、一緒に来館してきた友達の母親に絵本を読んでもらっていたこどもが、自分から母親に要求し、ひざの上に座りうれしそうに絵本を読んでもらうようになったなど）
	養育者	<p>（保護者）</p> <ul style="list-style-type: none"> ・アンケート結果から、家庭に帰っても意識してこどもとのかかわりをもっている姿が見えるようになった。 <p>（保育者）</p> <ul style="list-style-type: none"> ・保護者の意識の高まりとともに、取り組みの効果を感じた。それにより、これからの具体的な言葉かけをより意識するようになった。
養育者の声の概要	<ul style="list-style-type: none"> ・「案外ゆっくりあいさつをしていないものだ」と気付けた。 ・「あいさつ」の実行を言葉がけられて、改めて「あいさつ」の大切さに気付くことができた。 ・学生とのかかわりの中で <ul style="list-style-type: none"> ここんなに人見知りがあったことを知った。 自分以外の人もこどもの細かいところを見ているんだなあとと思った。 男性は嫌いだと思っていたが意外だった。 	
今回の取り組みのよかったと思うところ	<ul style="list-style-type: none"> ・新しい活動を試みたのではなく、日々の身近な「言葉かけ（あいさつ）」「抱きしめ（ふれあい）」に取り組んだことで、無理なく多くの保護者に自然に広められ、言葉かけができた。また、今後も引き続き取り組んでいける内容だった。 ・子育て支援センターが具体的な取り組みを積極的に提案していくということは初めてであったが、必要でもあると感じた。 	
取組みに対する実施園側の感想	<ul style="list-style-type: none"> ・同じ親子が続けて来館してくることは少ないので、経過を見たり変化を感じたりしにくい状況があった。 ・「あいさつ」に取り組んだことで改めて日々の言葉かけ（「あいさつ」を含む）の大切さを保護者共々確認できたように感じた。 ・親子のつながりで大切な“気持ちを通わせること”、“気持ちを言葉で表わすこと”のきっかけづくりになった。 	
改良すべき点	<ul style="list-style-type: none"> ・手作りの教材（大型絵本、触れる絵本など）を増やす。 	
今後の取組み予定	<ul style="list-style-type: none"> ・親子のかかわりの大切さを、いろいろな機会を通して、気長にこれからも声かけして行き広めていく。 	
今回のプログラムを活用するにあたっての提案	実践時期	<ul style="list-style-type: none"> ・センターの保育者と来館する保護者がある程度顔見知りになり、信頼関係が築きだした頃。
	取り組み内容	<ul style="list-style-type: none"> ・身近なこと、取り組みやすいこと、保護者の負担の少ない継続できることを進める。例えば 抱きしめ行動、日々の言葉かけなど（あいさつなど） ・取り組み内容を自然に広め、実行してもらえるために啓発のポスターなどをつくり、視覚に訴え声かけをしていく。 ・日頃の保護者とこどもの姿、子育ての楽しさに気付くよう、あえて子育て経験の乏しい学生とのかかわりをつくる。

今回のプログラムを活用するにあたっての提案	予想される効果	<ul style="list-style-type: none"> ・今まで気付いていなかったことが意外とあることを感じられる（それが、こどもとのかかわりであったり、こどもや自分自身のことであったりする） ・気付いたことでかかわりが変わり、肯定的な考えにもなる（意外にがんばっている自分に気付く）
その他（意見・提案など）	<ul style="list-style-type: none"> ・意識して取り組む中で効果を実感し、このような取り組みの大切さを知った。 ・少人数で親子ともに受け入れる場（支援センター）だからこそ、短い期間ではあるが養育者やこどもに変化が見られたのではないかと思われる。 	

（取り組みにかかる資料）



<p><きらきらメール> To _____</p> 	<p><きらきらメール> To _____</p> 
---	---

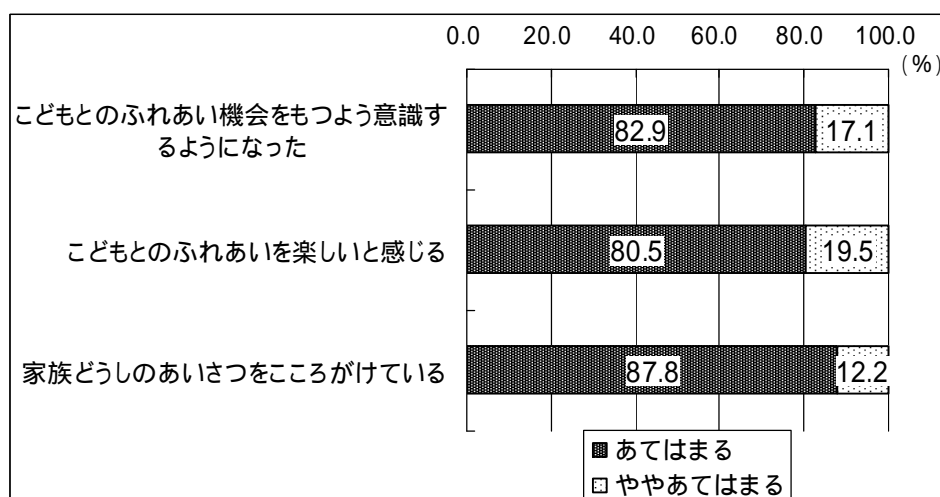
学生（子育ての経験がない学生）がこどもと一緒に遊び、「きらきらメール（こどもたちが遊んでいる姿を見て感じたことをカードに書く）」を渡し、親にこどもの姿を伝えていく。

2) 講師によるプログラム評価と考察

本フィールドワークは、センター来館の親子を対象としている。したがって、他のフィールドワーク実施施設と大きく異なる点として、センター利用の親子に継続的にかかわろうと思っても、いつ来館するかがわからないという実態がある。毎日センターは開館しているものの、同じ親子がいつ来館するかわからないため、取り組みの継続性や定着を求めることは難しい。また、例えば実践まで至ったとしても、次にいつ来館するかわからないので、取り組みに対する感想や意見を聞いたり、変化があったかどうかを観察したりすることはさらに難しい。このような環境を考慮して、港地域子育て支援センターでは取り組みの内容やねらいが設定されており、朝夕の「あいさつ」がテーマになっているのだが、センターの利用者の条件を踏まえて、よく検討された内容であると思う。何気ない「あいさつ」を取りあげ、センター内に「あいさつしよう！」のポスターを掲示し啓発を行っている。来館した親子に、まずはセンター職員自らが実践できる内容（あいさつをする）を設定しており、また特に大きな負担なく、少しの意識改革で家庭においても実践可能な内容である。難しい条件下で適切な取り組み内容を準備できたことで成果が期待できる。

「ご家庭において、家族同士のあいさつをこころがけている」というアンケート調査の結果、「あてはまる」と「ややあてはまる」の合計が100%であることから、取り組みの成果は明らかである。そして、この結果はこのような条件をもつ施設における取り組みとして、どのような内容が適切であるかという課題にも答えていると考える。

フィールドワークに対する保護者アンケート調査結果



一方、親子の来館時期が不定期であるという条件下ではあるが、では来館した親子に対する具体的な取り組みをどうするかという課題に対しては、子育て経験はないが保育者養成課程に在学する学生が参画する環境を用意している。一生懸命こどもにかかわる学生がこどものかかわりの質を高めるきっかけになることを期待して、いつもと少し違う環境を用意している。同時に「きらきらメール」に学生がこどもへの気づきを記載し、それを保護者に渡し読んでもらうことによって、わが子への興味・関心、さらに気づきを促すことを期待している。いずれも地道な取り組みであるが、報告シートに「親子のかかわりの大切さをいろいろ

るな機会を通して、気長にこれからも声をかけていき広めていく」と記載されているように、いつでも来館できるセンターがあるから安心という保護者のニーズに応えることが、ひいては親子の愛着形成の第一歩であると考えられる。それを理解し運営してくれるスタッフがいるセンターこそ地域のニーズに応えているといえる。

継続性の視点から

取り組みのねらいは、「日々の朝夕の『あいさつ』と同時に、抱きしめる行動を通して親子のつながりをつくる。また、『あいさつ』だけでなく気持ちを言葉で伝えていき、親子関係を深めていく。」と「学生との交流を通して自分のこどもの姿に触れたり気付いたりする。」である。日々、同じ親子が来館してくるわけではないが、報告シートに「少人数で親子共々に受け入れる場（支援センター）だからこそ、短い期間ではあるが養育者やこどもに変化が見られたのではないかと思われる。」とあるがその通りであろう。距離が近い、密度が濃いという利点を生かし取り組みを是非続けてほしい。

茨田第2保育所

1) プログラムの内容と振り返り

対象者	在所児、保育者				
取り組みのねらい	こどもの思いを受容し、一人一人の自己肯定感をはぐくみ愛着関係を結ぶ 自尊感情をはぐくむ 他者との関係が上手く取れる				
具体的な内容	それぞれのクラスのこどもの様子を毎週の週案会議で報告し、保育所全体のものとする。安定した養育者との関係を求めている様子を共有し、クラスでのかかわりを通して見えてきたものを確認する。意識して愛着関係を結んでいけるようかかわっていく。 こどもの気持ちを受け止めることが重要だと考え、「こどもを受容する」ということを示す方法として「私だけのためにある時間づくり」を実施し、そのことを記録した。 ねらいに基づいて記録の様式を作成することを報告し、保育者各自で書き留めておいてもらうよう伝える。(10/3 職員会議にて) 記録様式を各自に渡し、担当者がまとめた各クラスの報告をみんなのものとする。(11/20~11/30) 保育者がそれぞれどのようにかかわったか、について保育者全員が共有し、その中から今後に生かせるよう3ケースにしばりまとめる(12/5~12/11)				
留意点	自己肯定感をもてるように思いを受容する				
今回の取り組みのよかったと思うところ	保育士：自己を考察し、記録することでキーワードが見えてきた。 <table border="0"> <tr> <td rowspan="3" style="font-size: 3em; vertical-align: middle;">}</td> <td>こどもの心に沿う こどもからの言葉を待つ こどもの気持ち側から話す</td> </tr> <tr> <td>気持ちがほぐれ 気持ちを受け入れ 自分だけを見てくれる、認めてくれる</td> </tr> <tr> <td>一人一人を認める どうすればこどもが笑顔になるか こどもをあやす</td> </tr> </table> 沿う、認めるとはどういうことか。そのときこどもの呼吸に合わせているか。大人がかかわったという自己満足に終わらないように努め、こどもと共感する場面の具体例を分析していきたい。以上のことに気付いたのでよかった。	}	こどもの心に沿う こどもからの言葉を待つ こどもの気持ち側から話す	気持ちがほぐれ 気持ちを受け入れ 自分だけを見てくれる、認めてくれる	一人一人を認める どうすればこどもが笑顔になるか こどもをあやす
}	こどもの心に沿う こどもからの言葉を待つ こどもの気持ち側から話す				
	気持ちがほぐれ 気持ちを受け入れ 自分だけを見てくれる、認めてくれる				
	一人一人を認める どうすればこどもが笑顔になるか こどもをあやす				
今後の取り組み予定	今後も各クラスのこどもの様子を週案会議などで共有していく。愛着関係を結んでいくようにすすめていく中で出てきた疑問点(保育士のかかわり方やこの対応の仕方よかったのかなど)を検討していく。保護者に対しては、一人一人のよいところをエピソードをまじえ意識的に伝え、こどもとかかわったときの様子や保育士が感じたことを登降所時などに伝えていく。				

2) 講師によるプログラム評価と考察

「ハグ」や「ふれあい遊び」など複数のこどもやその保護者を対象に、共通の手段を用いて取り組む方法がある一方で、本フィールドワークはこどもと保育者とのかかわりに焦点をあて、個別にいていねいにかかわっている。対象児の内面まで洞察しながら外面に現れる行動を観察、記録し、保育所の保育者全員でそのこどもの“ありのまま”への共通理解を図り、さらにそのこどもへの理解を深め、自己肯定感をはぐくみ愛着関係の構築へとつなげていく研究方法は、保育者の資質向上を図るために求められている「職員の共通理解と協働性」を高めることにもつながる。

茨田第2保育所は民間委託1年目であるが、委託の移行期にあたっては保育の質を維持・向上する上で、こども一人一人の受容と自己肯定感の育成を課題に、保育所全体で取り組むことの意義は大きい。

記録では「具体的なかかわりと場面づくり」と「担任以外の保育者」の気持ちや意見の欄が設けてあり、それらの記述から、保育所全体で問題意識を共有しているからこそ、ていねいで我慢強い受容やかかわりが可能になると思われる。

今後は、保育者の受容方法についてさらに具体的に協議したり、保護者を巻き込んだ愛着形成をどのように展開していくかなどについて、検討し実践して欲しい。

継続性の視点から

週案会議の場で、保育所全体としての課題を設定し、観察、記録した内容を報告、協議する取り組みは、保育者の資質向上及び保育者全体の専門性の向上につながるもので、是非継続していただきたい。

(3) 研修の内容

フィールドワーク実施にあたり、愛着に関する認識を共有するため、「今どきの子育て事情」と「共感の育成」についての研修を実施した。

(講師提供資料)

今どきの子育て事情に関する研修

テーマ: 養育者との愛着形成

大阪市就学前児童健全育成プログラムにかか
るフィールドワーク実施に関して

—いまどき子育て事情—

相愛大学 人間発達学部 中西利恵

子育て支援

- 自信がないにもかかわらず、避けられない育児→育児は自信がなくても遊べて通れない
- 親の代わりに子育てををするのではない→親が親として自信を持って子育てができるように支援する
- 子育ては試行錯誤であり、これでいいのだろうかと思悩むのが自然という意識(感覚)を持ってもらう
- 一生懸命努力している自分自身に自信が持てるように支援する

やや回復…?

- 2005(平成17)年の合計特殊出生率: 1.26
- 2006(平成18)年の合計特殊出生率: 1.32
- 同出生率の上昇要因(厚労省による見方)
 - ①第3子以降の出生率が12年ぶりに増える等、第2・3子以降の増
 - ②71～74年生まれの団塊ジュニア世代女性の出生率増
 - ③結婚数(73万973件)の5年ぶり増による第1子増

↓

いずれも景気の回復が一因?(予断を許さない)

人口動態から

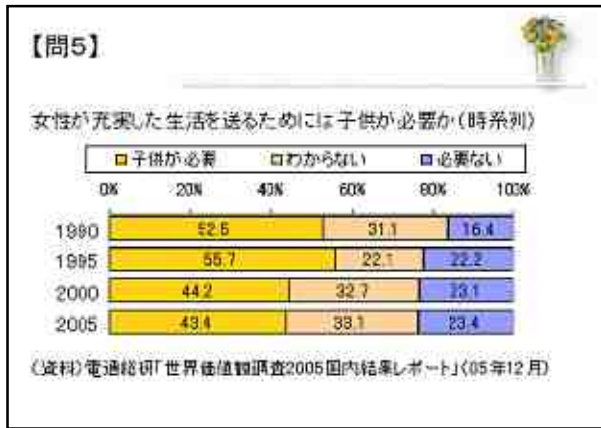
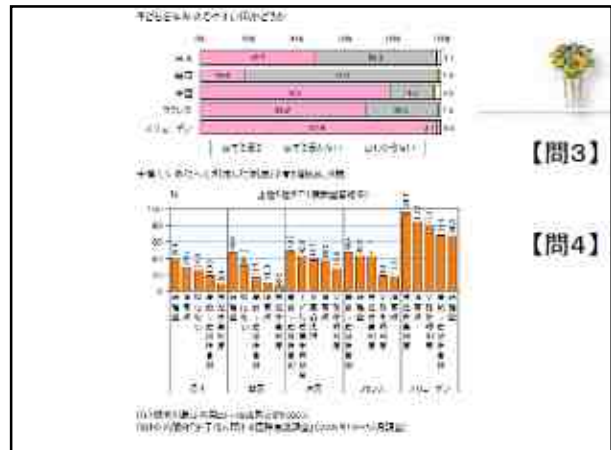
平成16(2004)年人口動態統計月報年計(概数)の概況

- 母の年齢別出生数:
 - ・平成15年から30～34歳が最多。
 - ・平成16年には35～39歳が20～24歳を上回る。
 - ・29歳以下では3万2280人減少。
 - ・30歳以上で1万9907人増加。
- 第1子出生時の母の平均年齢: 平成16年には28.9歳(昭和40年は25.7歳)
- 日本より低い合計特殊出生率の先進国:
 - ・イタリア1.24、韓国1.08

問題は、意識や社会的な環境

「少子化社会に関する国際意識調査」(内閣府)

- 少子化社会対策の効果的・効率的な推進に資するため、わが国と諸外国の国民の意識とその変化を調査し、国際比較を通じて我が国の特性を把握することを目的。
- 日本、韓国、アメリカ、フランス、スウェーデンの5か国
- 調査対象者: 20歳から49歳までの男女、1000サンプル
- 調査時期: 平成17年(2005年)10月～12月



総合的な少子化対策

- ① 保育施設(特に保育所)の増設や役割の拡充
- ② 在宅の親子(専業主婦)の子育て支援
 - ・ 2歳以下の約8割強の子どもが在宅
- ③ 児童虐待への対応

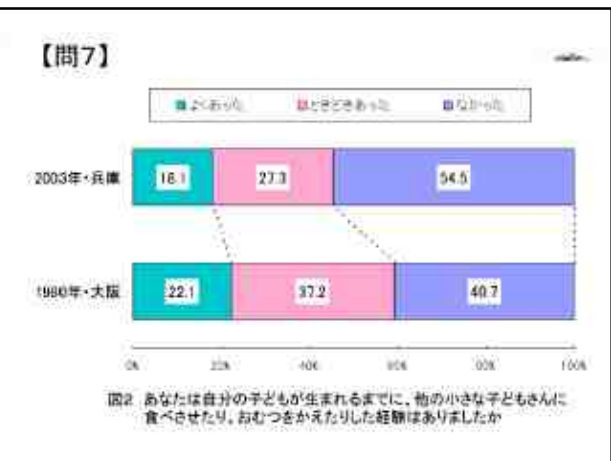
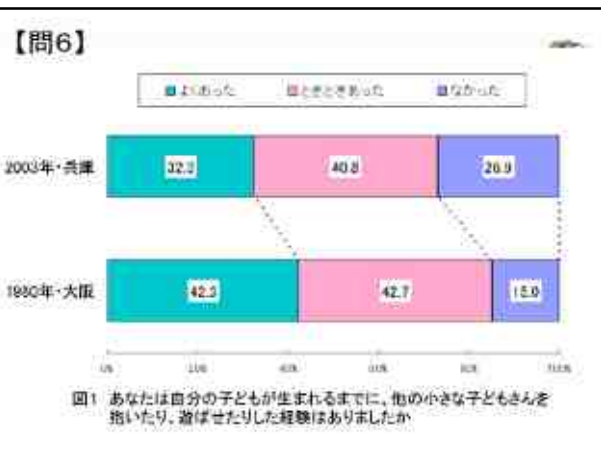
子育て環境の実態については、後で取り上げます。

兵庫レポートと大阪レポートの比較から子育て環境の実態を正しく把握することは大切

約20年の間にこんなに変化!

- ・ 兵庫レポート(2003年)と大阪レポート(1980年)
 - ・ 大規模な子育て実態調査(厚生労働科学研究)
 - ➡ 科学的検証に耐え得る調査
- ・ 大阪レポートの23年後の兵庫レポートが示すもの
 - ・ 母親たちはどんな思いで子育てをしているのか?
 - ・ 今、本当に必要な子育ての支援とは?

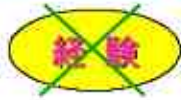
☆出典:原田正文著「子育ての変貌と次世代育成支援」名古屋大学出版会、2006



1.乳幼児を知らない



- ・「乳幼児を知らないまま親になる」親たち



- ・子どもを生んだ  すぐ親になれる

1.乳幼児を知らない



- ・ **どんな支援が必要？**
- ・ 親育ちの支援
 - ・ 親としての発達を援助
 - ・ 親支援プログラムの実践など
- (2) 将来親になる世代への親準備性の育成
 - ・ 乳幼児とのふれあい体験など
 - (小・中・高・大)

2.子育て家庭の孤立化



- ・ 「孤立」は最大の精神的ストレス
- ・ 【質問】 近所にふだん世間話をしたり、赤ちゃんの話をしたりする人はいますか(図A)
 - ⇒ 兵庫レポートの4カ月児健診
 - ①「まったくいない」母親が34.8%
(大阪レポートでは15.5%、2倍以上に増加)
 - ②3人に一人が母子カプセル状態

3.子育て仲間を求める母親



- ・ 図A【問8】と図B【問9】から
- ・ **2. 子育て家庭の孤立や3. 子育て仲間を求める母親よりどんな支援が必要？**
- ・ 母子カプセル状態で孤立している母子を孤立から救い出すこと
- (2) 子育てサークルをつくり、その活動を支援すること
- (3) 仲間づくりを援助すること

子育て支援の基本的視点



1. 子どもの発達を保障する
2. 親の発達を援助する

子育て支援の視点



- ・ 子どもに対する支援
- ・ 親・家族に対する支援
- ・ ネットワーク構築への支援
- ・ 地域の子育て環境への支援
- ・ 社会システムの支援

共感性の育成(かかわりの質を高めよう):職員研修

<p>テーマ: 養育者との愛着形成</p> <p>大阪市就学前児童健全育成プログラムにかかるフィールドワーク実施に関して</p> <p>提案1 共感性の育成 (かかわりの質を高めよう)</p> <p>和歌山大学 人間発達学部: 中西 利恵</p>	<p>保育(子育て)の質=かかわりの質</p> <ul style="list-style-type: none">・ キーワードは「かかわり」=関係性<ul style="list-style-type: none">・ 「支え合う」関係性の形成・ 多様な他者との相互行為 <p>(例) 母子密着 →外遊び・多様な人・自然とのかかわりの喪失</p>
<p>人とかかわる姿勢として 必要な基本</p> <p>多くの知識? 多くの技能?</p>	<p>一番強調したいこと</p> <ul style="list-style-type: none">・ 相手への共感
<p>共感の定義</p> <p>相手の感情を知って相手と同じ感情を抱くこと</p> <p>→</p> <p>相手の気持ちにどこまで敏感になれるか</p>	<p>より深く、より広く共感する過程</p> <p>3つの過程</p> <ul style="list-style-type: none">第1の過程: 同化的共感第2の過程: 調節的共感第3の過程: 共感の表現

【第1の過程：同化的共感】



- 相手と同じような経験をする
- 相手のした似たような経験を思い出す
- 自分の体験に相手を引き寄せて考える

同化的共感の落とし穴



- 下手とすると、
- 勝手な同情
- ひとりよがり
- 一方的な思いこみ
におちいる

それを防ぎ、
より深い共感
に至るには、
↓
調節的共感

【第2の過程：調節的共感】



- 自分の体験を越えて、相手の経験の理解しにくい面をとらえ、共感すること
- 自分の経験の延長線上では簡単にとらえられない点、違和感にこだわり、異質性に敏感になること

調節的共感において大切なこと



観察すること → **横並びのまなざし**
(共同注意)

- 一生懸命に観察する。(相手の言葉・表情・仕草・行動など相手の様態について注意深く見、聞く。)
- ↓
- 相手の視線の行き先を共に観る。
- 本来他者に関心を持っていれば、自然に観察し、あるいは相手のことを感じ取っているのでは。

【第3の過程：共感の表現】



人とのかかわりの中で共感が意味をもつには
表現されなければならない

- 意識的に共感を表現する必要がある
- 自らの身体を用いた演技
- でも、決してうそではない
- 真実の核を拡大すること
- 演技し表現することにより共感が深まり、新しいことが見いだされることもある

表現 → 伝わる → 応える



- 自らの共感の正しさが確かめられる。
- 共感の力が増す。
- 何よりも共感を共に分かちことほど人間的なことはないのでは。

子育てのもっとも大きな喜びが、そこにあるということに気づいてほしい


共感性の育成(かかわりの質を高めよう):西大道保育所での保護者講演

「子育てを通して親(大人)も成長する」という表現を耳にされたことがあると思います。「毎日こどもの世事に追われ余裕もないのにどこが成長?」と思われるかもしれませんが、実は子育てを通して私たち大人は共感性を高めているのです。共感性とは簡単に言うと共感する力だと考えてください。「共感できる」ということは「相手の立場にたてる」「相手の立場にたって考えられる」ということです。相手を「知る」という知性であるとも言えるでしょう。「共感的知性」と呼ぶ場合もありますが、この力は育ち合う関係の中で育成されます。保育の世界では「こどもとともに育ち合う保育者」という表現を使いますが、それは保育者の専門性として、かかわるこどもの立場にたち、一緒に感じ、考え、味わう姿勢が必要不可欠だからです。

<p>テーマ: 養育者との愛着形成</p> <p>大阪市就学前児童健全育成プログラムにかかるフィールドワーク実施に関して</p> <p>共感性の育成 (かかわりの質を高めよう)</p> <p>相愛大学 人間発達学部 子ども発達学科: 中西 利恵</p>	<p>毎日の生活で</p> <p>子どもと一緒にいると楽しい発見があるはず → でも、その楽しさに気づきにくい 味わう余裕がない現状がある</p> <p>いつも時間に追われている。なんだかちっとも共感できない。することたくさん</p> <p>思い通りにいかない……</p> <p>ちょっとしかけを作りましょう。 ちょっと心持ちをチェンジしましょう。</p>
<p>保育(子育て)の質=かかわりの質</p> <p>・ キーワードは「かかわり」=関係性</p> <ul style="list-style-type: none">・ 「支え合う」関係性の形成・ 多様な他者との相互行為	<p>人とかかわる姿勢として 必要な基本</p> <p>多くの知識? 多くの技能?</p>
<p>一番強調したいこと</p> <p>・ 相手への共感</p>	<p>共感の定義</p> <p>相手の感情を知って相手と同じ感情を抱くこと → 相手の気持ちにどこまで敏感になれるか</p>


育ち合う関係性のある環境が子どもにとって一番学ぶことができる環境です。育ち合う関係は、家庭では母親と子どもだけでなくその他の家族、例えば父親と子どもや母親と父親の大人同士の関係も含まれます。ですから、大人である私たちが共感的なかわりを心がけることにより、子どもの発達が豊かになるということです。もちろん、子どもの年齢によって発達の姿がかわり生活場面も違ってきます。それによって、具体的ななかわりの配慮は異なってきますが、親として、なかわりの根本は共通です。さらに言えば、対象が子どもにかかわらず、大人にまでひろげていっても共通です。ですから、見方を変えれば、子育ては私たち親（大人）も人としてレベルアップを図る機会であるということになります。

では、具体的にどのようなことに心がけてなかわりの質を高めていけばよいのでしょうか。「親として子どもとどのようになかわるべきか」という問いのこたえは、子育てに関するハウツーやルールなどとしてたくさん存在します。ここでは、視点を変えてみてください。それらを守る（つまり「～すべき」という視点ではなく（とりあえず守られていると安心したり、あるいは子どもが育っている・学んでいると感じたりしますが）子どもに身をゆだね、一緒に味わい、知っていくというような視点が大切です。基本は目の前の子どもに目を向け、いかに子どもとの世界を共有していくかということです。

より深く、より広く共感する過程 

3つの過程

第1の過程：同化的共感
 第2の過程：調節的共感
 第3の過程：共感の表現

<p>【第1の過程：同化的共感】 </p> <ul style="list-style-type: none"> ・相手と同じような経験をする事 ・相手の似たような経験を思い出す事 ・自分の体験に相手を引き寄せて考える 	<p>同化的共感の落とし穴 </p> <ul style="list-style-type: none"> ・下手とすると、 ・勝手な同情 ・ひとりよがり ・一方的な思いこみ <p>におちいる</p> <div style="border: 1px solid black; padding: 5px; display: inline-block;"> <p>それを防ぎ、より深い共感に至るには、 ↓ 調節的共感</p> </div>
--	--

【第2の過程：調節的共感】



- 自分の体験を越えて、相手の経験の理解しにくい面をとらえ、共感すること
- 自分の経験の延長線上では簡単にとらえられない点、違和感にこだわり、異質性に敏感になること

調節的共感において大切なこと



観察すること→横並びのまなざし (共同注視)

- 一生懸命に観察する。(相手の言葉・表情・仕草・行動など相手の様態について注意深く見、聞く。)
- 相手の視線の行き先を共に観る。
- 本来他者に関心を持っていれば、自然に観察し、あるいは相手のことを感じ取っているのでは。

【第3の過程：共感の表現】




人とかかわりの中で共感が意味をもつには
表現されなければならない

- 意識的に共感を表現する必要がある
- 自らの身体を用いた演技
- でも、決してうそではない
- 言葉の核を拡大すること
- 演技し表現することにより共感が深まり、新しいことが見いだされることもある

以上のような視点で、さらに具体的な子どもとかかわり方について考えてみましょう。一番簡単で、実はなかなか実行しにくいかわり方は、子どもが呼んだときにすぐに振り向いて応えるということです。そして、子どもの話に耳を傾け、それに応答するということです。呼ばれると、あらたまって向き合うための準備が必要とってしまったりもしますが、まずは子どもの顔を見る、子どもの目線に合わせるだけでもよいのです。そして、子どもが見ているものを一緒にみる。できれば、子どもを上から見下ろすばかりではなく、同じ高さまで降りてみるともっとよくみえます。そうすると、「みる」は「みる」でも目でみえるだけでなく心でもみえてくる(つまり共感する)可能性が高まります。そこに、言葉による受容が加わるとさらに高まります。例えば「そうだねえ。」とか「ほんとだあ。」と同意する。また「すごい！」と賞賛する、「びっくりしたね。」と感情移入する。まだおしゃべりのできない乳児でも、眠たそうにしていると「眠たくなったね。」と感情移入を話しかける。「ブーブー。」と一語文でおしゃべりすると「ブーブー。」と繰り返すというようなかわり方です。さらに、そこにスキンシップが伴えばもっと子どもの心に響くことは間違いなしです。「すごいねー。」と受容しながら頭をなでる。「それはダメ！」と制止しながら手を握る。その他にも抱きしめる、背中をさする、ほっぺを両手でつつむなどいろいろ工夫できます。保育の世界では子どもに「寄り添う」という表現をよく使いますが、このようにして保育者も日々受容し、寄り添う試みをしています。子どもは勝手に育ちません。寄り添ってくれる大人がいることで、子どもが育つ環境が保障されます。「一緒にみる」ことは寄り添うことの基本です。子どもがたとえ声を出して呼ばなくても、例えば立ち止まったり、体をすり寄せてきたり、袖をつかんだりしてもそれは合図ですか

ら一緒にみるところから始めてみてください。一緒に生活をしていますから、一緒に食べるや一緒にお風呂に入るもできます。一緒に話す、一緒に遊ぶ、一緒に読むなど一緒にすることで子どもは自分を受容してもらっている、寄り添ってくれていると感じ、そこから信頼が生まれます。親子の信頼関係は「信じろ！」と言われて生まれるものでももちろんありません。私たち大人が他者との信頼関係を築くときと同様、どんなふうにかかわるかそのかわりの質が求められます。自分の子どもだとい親の甘えが出て、親の都合に合わせたくらいがあると思います。そんなときは、子育てを通して子どもとともに育ち合う環境をちょっと意識してみてください。


表現 — 任せる — 応える



- ・ 自らの共感の正しさが確かめられる。
- ・ 共感の力が増す。
- ・ 何よりも共感を共に分かちあうことほど人間的なことではないのでは。

子育てのもっとも大きな喜びが、そこにあるということに気づいてほしい

その他具体的には



- ・ 子どもに語って聞かせる
- ・ 子どもに歌って聞かせる
- ・ 子どもに作って食べさせる（食育）
- ・ 一緒に見る・歌う・読む・話す・遊ぶ・食べる

うれしいなあ

↓

応答的保育

ふれあい遊び

一緒にする（寄り添ってくれる大人が居る）

3. フィールドワークの成果を踏まえたプログラム提案

(1) フィールドワークの総評

どの施設も単発の取り組みに終わることなく、無理のない実践、普段着の実践として継続させることが可能な取り組み内容を設定している。今後の取り組みとして、可能な範囲で対象をひろげ、課題を解決しながら実践を試みていくことが大切である。こどもを取り巻く人的環境の意識改革はまだ途上ではあるが、どの施設においても養育者（保護者と保育者）の育ちや育ち合いの姿がみとめられた。こどもは社会的関係の中で発達するが、就学前のこどもが育つ主たる場は保育・教育施設および家庭である。こどもはもちろん、保育者、保護者、保育者同士、保護者と保育者、保護者同士において「知る」「味わう」「気付く」「わかる」というような体験が展開し、こどもの心の安全基地として主たる養育者とこどもの相互関係の充実、こどもの愛着行動や探索活動の促進や拡大、こどもの養育者への信頼とこども自身の自己肯定感の形成につながるような取り組みが期待される。今後多くの施設や家庭も巻き込んでそのような取り組みが実施できるよう、この5園の取り組みから導き出された提案も参考にして、具体的なプログラムの作成を試みていただきたい。

(2) プログラムに反映させる知見の提案

「ハグしちゃお〜」（こどもにとって抱かれるという行為）という取り組み

抱きあげない行為でありながら「抱っこ」に近い感触・スキンシップを図ることができ、手軽に行えるため、集団保育の場でも家庭でも愛着関係を深める手段（ステップ）として実践可能である。自然体で定着するまでは、対象児の発達を考慮して実践の仕方やかかわり方を工夫する。また、保護者の参画は園生活において全員が楽しめるようになってから、園だよりなどを通して家庭に呼びかけるというように、段階を追った取り組み方が効果的である。

「ふれあい遊び」という取り組み

低年齢児の親とこどもとのかかわりにおいて、保育者が感じていることとして多いのが「こどもとの接し方、遊び方がわからない」である。運動機能や言葉の発達がまだまだ未熟であるこの時期、どうやってかかわればよいか戸惑う保護者に「ふれあい遊び」という具体的なステップ（手段）を提供し、一緒に実践していくという試みは非常に有効であろう。この時期のこどもは、特定の大人との応答的なかかわりにより、情緒的な絆が深まる。あやしてもらおうと喜ぶなど、やりとりが盛んになる一方で人見知りをするようになる。また周囲の人や物に興味を示し、探索活動が活発になる時期でもある。そのような発達の特性を踏まえ、取り組みの内容として「ふれあい遊び」を設定したのは非常に適切である。

遊びの内容として覚えやすいメロディーや歌詞、動き方の遊びが選択されており、遊び方や歌詞を書いた資料の準備もされていて、家庭に持ち帰っても繰り返し気軽に遊べるような配慮として大切である。

「ふれあい遊び集（仮称）」など家庭でも実践しやすいような資料を用意するのもよい。

こどもと養育者以外の第三者の活用

本フィールドワークの場合は専門分野の大学教員であったが、取り組みの意味に関する理解

を深められるような第三者からの講話や助言があると、より円滑に実践が展開できるであろう。第三者の方が素直に耳を傾けやすい。また、なんのためにするのか、どんな変化があるのかという見通しがあった方が取り組みに対する意識や関心が高まる。

このときの講演の内容と勉強会の内容から、在宅家庭も含めた愛着形成の取り組みポイントについて、前述の通りまとめているので活用されたい。

保護者に還元する取り組み(にこにこカード)

本フィールドワークでは「にこにこカード」という手段を用いたが、このように保護者に取り組みの成果について見通しがもてるようなしかけは、親の発達を支援するという視点からも効果的である。また、親同士で学び合えるしかけでもあり、もちろん保育者にとっても共通理解を図りやすくなり、結果的に見通しのよい保育が展開でき、見通しのよさは保護者の安心につながり、みんなで子育てを支援する体制が自然体で組めると考える。

観察法と週案会議の活用

保育者の受容する力を磨き、こども一人一人の自己肯定感をはぐくむため、保育所全体で課題意識を共有できるよう、保育者とこどもの関係に焦点をあてて観察、記録をとり、定期的に報告会を開く。

「ふれあいタイム」という取り組み

幼稚園という特性を生かし、迎えの時間を活用して、短時間ではあるが有意義な親子のふれあいタイムを毎週実施する。お迎え時間が統一されていることでこのような実践が可能になるが、毎週繰り返し取り組むことができるメリットは大きい。愛着形成の発達はこどもだけでも保護者だけでもできない。両者がともにふれあい、かかわりあいを重ねることで実現するため、特に大人側である保護者の意識は重要である。しかし、意識があってもなかなか実行に移せないという保護者も少なくない。幼稚園において保育者や他の保護者も一緒に実践していける場は理想的である。

「あいさつをしよう」「言葉で伝えよう」という取り組み

これらの取り組みはとても簡単に実行できそうである。できそうだという課題設定の仕方は集団保育の場に入る前の親子にとっては必要である。まずはそこから始めてみることで、そしてその場合、そばで見守ってくれている人がいること(センター職員)が有効に働くだらう。全国各地に地域子育て支援センターが設置されているが、センターにおいても課題を設定し、意識して取り組む、利用者とともに効果を実感していくことが大切であると考えられる。

